

年百六千二紀皇 頌奉

初春の人の形籥稿

四ッ橋畔

文樂座



かまざら
ほら
を

乍憚口上

皇紀二千六百年の輝やかしき新春を迎ふる事として、茲に當座に於ても一段の緊張を以て傳統を誇る固有藝術本來の使命に鑑み、其精神を發揮致すやう相勵み、當る辰年初春興行として一座連中總顔ぞろひの上、狂言もお芽出度き新年にふさはしきやう當座秘藏の名狂言を各自受持ち、役を選びて十二分の腕を揮はしむるやう苦心配列して御尊覽に供すべく、ことに又大切には新曲をもつて優美絢爛なる振り事をさし加え、あら玉の年の花を飾ること、相成甲候次第右については一座連中は何れもこゝに報國的熱演を以て日頃の御愛顧に酬ふべく候まゝ何卒舊に倍して陸續御尊來を賜り度先は御挨拶旁々御願ひ申上候

昭和十五年元旦

四ッ橋 文樂座 敬白

昭和十五年一月元旦初日

初日に限り一時開幕
 二日より七日迄二時開幕
 八日より毎日三時開幕

・御觀覽料・

- 一等席 御一名 金三圓三十錢
(二階座席三十錢上り)
- 二等席 御一名 金一圓三十錢
- 三等席 御一名 金六 十 錢
(外に各等入場税一圓)

一等御座席
 二等椅子席
 〔は五日前より〕

前賣切符發賣致居候

- 前賣切符 南⑤四七壹壹番
- 專用電話 南⑤三〇三二番
- 一般御用 南⑤三七八八番
- の電話

お草履の準備は御座みますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座みます。



熊鹿子嬢道成寺

シテワキレ
竹本播源太夫
竹本常路太夫
竹本津磨太夫
野澤友平造彌夫
鶴澤友友若平造彌郎
鶴澤友友若平造彌郎

一谷嫩軍記

脇ヶ濱の段
熊谷陣屋の段
竹本相生太夫
豊澤呂生太夫
竹本新左衛門
豊澤大隅太夫
竹本廣助
鶴澤清六

熊澤道八調 採茂郎陣平振附
新曲三人片輪

覺目
盲目
啞目
有徳人
竹本相生太夫
竹本呂生太夫
竹本伊達太夫
竹本南達太夫
豊澤和泉太夫
鶴澤重太夫
鶴澤友重太夫
鶴澤清衛太夫
野澤吉藏

彌作鎌腹の段

竹本綴治太夫
竹本寛太夫
鶴澤友次郎夫

義士銘々傳



萬歳

豊竹泉太夫
豊竹伊勢太夫
竹本隅太夫
竹本松若太夫
豊澤越島太夫
竹本猿名太夫
野澤吉二
鶴澤芳季

年百六千二紀皇 頌奉
璃瑠淨形人の春初

日初旦元月一
幕開時二迄日セリよ日初
幕開時三日毎リよ日八

由良湊千軒長者

竹本南部太夫
鶴澤友重太夫
鶴澤伊達太夫
野澤八衛門
豊澤仙松

關取千兩襷

豊竹駒太夫
竹本織太夫
竹本富太夫
竹本宮太夫
豊澤清二

女夫の春駒

女房おと川丸
鐵名川丸
呼阪屋丸
文おと川丸
才おと川丸
引ぬき萬歳
吉田光三郎
桐田政吉

猪名川内の段

女房おと川丸
鐵名川丸
呼阪屋丸
文おと川丸
才おと川丸

山の段

女房おと川丸
鐵名川丸
呼阪屋丸
文おと川丸
才おと川丸

彌作鎌腹の段

女房おと川丸
鐵名川丸
呼阪屋丸
文おと川丸
才おと川丸

新曲三人片輪

女房おと川丸
鐵名川丸
呼阪屋丸
文おと川丸
才おと川丸

熊谷陣屋の段

女房おと川丸
鐵名川丸
呼阪屋丸
文おと川丸
才おと川丸

脇ヶ濱の段

女房おと川丸
鐵名川丸
呼阪屋丸
文おと川丸
才おと川丸

京鹿子嬢道成寺

文樂座

電話南四七壹壹番

四ツ橋畔

☆うせまし廢全を品製金☆



國民精神總動員

奉天報國

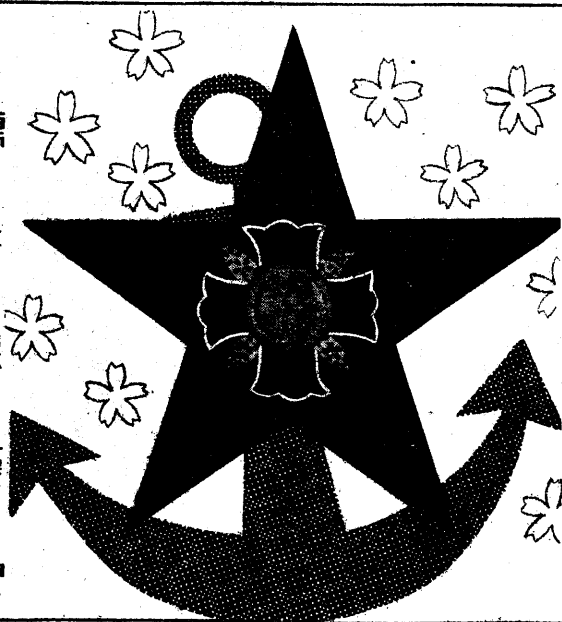
聖子持久



國を護つた傷兵護れ

國民精神總動員中央聯盟

傷兵保護院



奉頌 皇紀二千六百年

初春の人形淨瑠璃

鶴澤友次郎調

京鹿子娘道成寺

一谷嫩軍記

脇ヶ濱の段
熊谷陣屋の段

鶴澤道八調
榎茂都陸平振附

新曲三人片輪

義士銘々傳

彌作鎌腹の段

由良湊千軒長者

山の段

關取千兩幟

猪名川内の段

女夫の春駒

引ぬき萬歳

二時卅分より
(幕間十分)

二時四十分より
五時十分まで
(幕間十五分)

五時廿五分より
六時五十分まで
(幕間十五分)

六時廿分より
七時四十分まで
(幕間十分)

七時五十分より
八時十五分まで
(幕間十分)

八時廿五分より
九時五十分まで
(幕間十分)

九時十五分より
九時卅分まで
(打出し)

太夫・三味線・人形

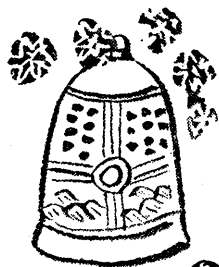
一座總出演



浄瑠璃
人形

元旦初日

初日に限り
二日より七日迄
八日より毎日
一時開幕
二時開幕
三時開幕



京鹿子娘道成寺

シテ
ワキキ
ツワ
レ

竹本源太夫
竹本播路太夫
竹本常子太夫
竹本津磨太夫
竹本土佐太夫
野澤吉夫
鶴澤友太
鶴澤友太
鶴澤友太
鶴澤友太
鶴澤友太

人形

白拍子念花
信才念花
雲才念花
安養坊坊坊子
吉吉桐桐
田田田田
玉紋玉十
德市郎幸郎

鶴澤友次郎調

京鹿子娘道成寺

この京鹿子娘道成寺は富十郎派の道成寺で、従來のものを集大成したものである。筋は道成寺再度の鐘供養を白拍子花子實は清姫が拜みに來る女人禁制として寺僧が留めるを強いて所望するので許し、その代りに舞を所望する。白拍子は舞ながら鐘に近づき遂に鐘の中に消入る。

(床本) 京鹿子娘道成寺

月は程なく入汐の煙り満くる小松原いそぐとすれど戀風のふり袖重く吹たまり、あちな娘と人毎に笑はゞ笑へ百々千鳥、急ぐ心かまだ暮ぬ日高の寺にぞ着にける、M嬉しやさらば舞んとて、あれにまします宮人の鳥帽子を暫しかりに着てすでに拍子すめけれ。

花の外には松ばかり、花の外には松ばかり、暮れそめて鐘や響くらん、鐘に恨はかずかずござる、初夜の鐘を撞くときは諸行無常と響くなり、後夜の鐘を撞くときは是生滅法と響くなり、晨鐘のひびきは生滅、入相は寂滅爲樂とひびくなり、聞いておどろく人もなし、われも五障の雲晴れて真如の月を眺めあかさ言はず語らぬ我がこころ、亂れし髪の亂るもつれないは唯移り氣な何うでも男は悪しよ者、みやこ育ちははすはなものぢやえ、戀のわけ里武士も道具をふせ編笠で、張と意氣地のよし原、花の都は歌でやはらぐ、敷島原につとめする身は何人とふし見の墨染、煩惱菩提の撞木町よりには四筋に通ひ木辻にかむるだちから室の早咲、それがほんに色ぢや一い二う三い四う夜露雪の日しもの關

路も共に此の身を馴染重ねて仲はま
 る山たゞ圓かれと思ひそめたがえん
 ぢやえ、梅とさんく櫻は何れ兄や
 ら弟やらわきて言れぬな花のいろへ
 あやめかきつばたは何れ姉やら妹や
 らわきて言れぬな花のいろへ、西も
 ひがしもみんな見に來た花の顔さよ
 え、見ればこひぞ増すえさよえ、か
 はゆらしさの花むすめこひの手習つ
 ひ見ならひて何人に見しよとて紅織
 漿つきよぞ、みんな主への心中だて
 おく嬉し、おく嬉し、末はかうぢや
 にな、さうなるまではとんと言はず
 にすまそぞえと、誓紙さへいつはり
 か嘘かまことか何うもならぬほど逢
 ひに來た、うつかり悋氣せまいぞと
 たしなんでみても、なさけなや、女
 には何がなる殿御殿御の氣が知れぬ
 氣がしれぬ、悪性なく氣が知れぬ
 うらみうらみてかこち泣露を含みし

さくら花、さはらば落ちん風情なり
 おもしろの四季の眺めや、三國一の
 富士のやま、雪かと思れば花の吹雪
 か、吉野やま散り來る、散り來るあ
 らしやま朝日山やまを見渡せば歌の
 中やま石山のいなり、さる程にさる
 ほどに、さるほどに寺々の鐘月落
 ち、鶉鳴いて霜雪天にみち潮、程な
 く此の山寺の江村の漁火、愁に對し
 て人々眠れば好き隙ぞと立舞ふ様に
 ねらひ寄つて撞かんとせしが思へば
 此の鐘恨めしやとて龍頭に手をかけ
 飛ぶよと見えしがひきかづいてぞ失
 せにける。

當ル 辰 歲 初 芝 居 吉例

元旦 初日
 毎日 晝の部午前十二時開幕
 夜の部午後五時開幕

(晝の部)

- 第一 妹脊山婦女庭訓
- 第二 夫婦中春片鎌
- 第三 近江源氏先陣館
- 第四 縁の四ッ橋

(夜の部)

- 第一 神代物語 劍 文筆奉本天 三味線出演
- 第二 戀女房染分手綱
- 第三 神戸事
- 第四 南
- 第五 淨瑠璃 釣

第一 御座部 劇料
 一等 五席 八圓五十錢
 二等 三席 五圓五十錢
 三等 二席 三圓五十錢
 特等 一席 三圓五十錢
(外に入場税各等一圓)

どうとんぼり
 中座



左の
めか
ね
月夜

一 谷嫩軍記いちのたにふたばくんき

と義親子恩愛の至情に涙流るゝ大名
作であります。

脇ケ濱の段

熊谷陣屋の段

(床本) 脇ケ濱の段

脇ケ濱の段

(竹本相生太夫
豊澤新左衛門
豊竹呂太夫)

人形

石屋彌陀六	吉田玉藏
娘の局	吉田榮三郎
藤の局	吉田小兵吉
須股運平	吉田文二郎
番場忠太	吉田文之助
庄屋	吉田玉徳
百姓	大ぜい
取巻	大ぜい

この淨瑠璃は寶曆元年十二月十一日
初日の豊竹座に初演されたもので、
三段目の陣屋迄は並木宗輔の作で、
この一の谷の三段目迄書て病歿しま
した。この曲の内容を申し上げますと
一の谷合戦に行く熊谷次郎直實は堀
川御所で義經に須磨の陣所の若木櫻
に對して一枝を切らば一指を切るべ
しといふ禁札を渡されました。それ
は義經は平家の公達の蓄の花をむざ
ざ散すなといふ謎であります。須
磨の浦で敦盛を組敷いた直實は我子
の小次郎を身替りに立てゝ首討ち實
檢に備へ自分は無情を悟つて剃髮し
て蓮生と名を改めて行脚に出る。忠

行く空の月もさやけき夜の道、御影
の里を立出て、四方の景色も澄みの
ぼる、高根にひびく布引の瀧の白糸
湊川、流れも初利天上寺、摩耶の御
山を右手に見て、氣も磯傳ひ須磨の
浦、一の谷にぞ着きにける。

東雲近き横雲のたなびく雲も青々と
枝葉繁りし松蔭につゞくり立つた五
輪の石塔、遠目にそれと彌陀六が、
走寄つて是ぢや、詞先達て遣は
された所書に合せ、若い者等に言付
けて建ては建てたがちつくり笠にふ
りがあると、押直してためつすがめ
つ詞サアお若葉様恰好見て下さりま
せ何とようござりませうがや、是か
ら狂ひのない様に留を合すは漆喰と

懐より蓋物取出し、重ねの際にホテ
くくと塗る所へ、山畑かせぐ百姓ど
も、鋤鉞かたげどやくと、オ、太
郎兵衛かいの、早やいの、オ今朝ま
た朝霧で夜明けが分らぬわいのう、
コツカツコウア、鶏が鳴いた夜明ぢ
や、ハハ、、、どやくとどや、オ
、與次郎危いぞ、そこらに崖ながあ
るぞよ、オットちやポイトコナくと
どどんやどやくと、オ何ぢや向ふに
光るものが見えるのう、オあれや何
ぢやあるなあれや人魂ぢや、アイヤ
くと赤玉ぢ、や赤うて丸いわいエ、
何云ふぞへ、あれや石屋の親父の頭
ぢやないかい、ホンニビヨコくと動
くは、呼んで見やんせくと、オ、イ
親父殿の石屋かいの、オーイ石屋の
親父殿かいの、おいやいこりや皆と
うから精が出るな、イヤこちとらよ
り此方がとうからあぢな所へ石塔を

建てさしやつたの、ハテあの人は商
賣ぢやによつて、どこで有らうが持
運んで建てねばならぬが、誂人が希
有なやつぢやの、ア、これくとむさ
と虜相言ふまい、其施主人が爰にど
ざるぞナアお若衆様、我も人も亡者
の爲卒塔婆一枚立てるとも三惡道を遁
るるといふ、まして大層な此石塔を
お建てなさるは御奇特なお若衆様、
結構なお志でござります。イヤこれ
親仁殿、お若衆の施主人のと人もな
いにそりや何いはしやる、何とわい
らは目が覺めぬな、アレまたどこに
人がゐるぞいの、ハテこれ爰にハア
ほんに見えぬわ、ハレめんえうなた
つた今迄爰にで有つたが、ハアどつ
ちへござつたな、お若衆様くと、
呼べば俱に百姓ども、爰かそこかと
尋ねる所へ、娘の小雪がかちはだし
息もすたくとフシ走り着き、詞お若

衆様にたつた一言いひたい事が有つ
てきた、ちよつと逢はして下さんせ
詞イヤ逢はして下さんせ、詞イヤ逢
はして所ぢやない影も形も見えぬわ
い、コレ親父殿、お若衆がゐやらね
ば忽ち此方の損ぢやぞや、所を知つ
てか、但し先銀でも取つて置かしや
つたか、いやてや、仁體が好いから
所も問はず一錢も受取らなんだ、ハ
ア夫でよめた、石塔をかこ付に何ぞ
せしめるわる工、扱は騙に極つた、
詞遠くはうせまいぼつかけんサア皆
こいと立騒げば、詞イヤ、これ
くと待たしやんせ、よもやそんなさ
もししい心なお方ではあるまい、其證
據はわしにやるとて、コレ此笛を、
貰うたのか、ハアどれくと、ヤこり
やまあ袋が結構な赤金欄ぢや、扱笛
は生竹でもないが節からちつくり枝
葉がある。何にもせよ、むつかしい

代物ぢや、オ、むつかしいことなら
 お庄屋様で尋ねて来い、この間大阪
 から薬罐と云ふのみせたら、これ
 や兜ぢやと云はつた、この手にみる
 様なもの、願へ引掛けるのぢやて
 又口みる様なものは兜の角ぢやて、
 片方ないのは晝寝の時勝手が好い
 様にしたあるのぢやて、何て薬罐と
 云ひますと云ふたら、戰場で敵が矢
 當るとかんと鳴つてそれで薬罐ぢや
 と云はさしやつた、ハハ、ハハ、ぢ
 やによつてこの笛もお庄屋様で尋ね
 たら知れるぢやらうか、ハテサテよ
 いわい、石塔をたどした代りにおい
 ていんだ、笛なれやそれがまことの
 あをたの笛ぢや、エ、こんなことな
 ら半銀取つて置いたら、まんざらの
 損もせまいにあた惨たらしい目にあ
 うたと、悔むにかひもあら笑止や、
 彌陀六がぬかれたと傳へて諸事の詭

物、手附を取るといふ事は、フシ此
 時よりと知られたり、時しも跡の松
 原より足早にくる女子は、何者成る
 といふ中に走り近付き藤の局、詞コ
 レ、ちよつと物問はう、船寺はど
 つちぢやの、教へてたもとありけれ
 ば、詞ハア、夫は是からよつ程遠い
 が、見れば賤しうない女中の、何故
 寺を尋ねさつしやる、されば妾は様
 子有つて都より追手のかゝる者、暫
 く影を隠さん爲と、宣ふ中に目早く
 も娘が持つたる袋を見附け、詞なう
 それちよつと見せてたべと、手に取
 給へば粉ひなき青葉の一管、詞ヤア
 是は我が子の敦盛が肌身放なさぬ秘
 藏の笛、どうして此方の手にあると
 聞いて親子も不審顔、百姓ども口々
 に、詞其敦盛といふ人は、此間の戦
 に、オイ名は何とやら云ふたの、オ
 、何でも黒い繩ぢや、黒い繩なら墨

繩か、イヤ、笑ひ繩か、イヤ、
 黒うて丸いわい、ア、たどんか、イ
 ヤ、そんなものぢやあらせんわい
 斯う眞黒で耳があつて足があつて、
 ア、鍋ぢや、エ、イヤ、鍋ぢやな
 いわい、何でも黒うてにがいのぢ
 や、だらすけ、イヤ、熊の膽、オ
 、熊、熊、その熊のいのじん次郎兵衛
 と敦盛様とのう與次郎、こなたその
 時見て居やしやつたでないかいのう
 オ、俺や柴して行て山の原で辨當食
 うて見てた、熊次郎めが馬に乗つて
 大きな風呂敷せたら負うて黒い扇を
 チョイト上へ差し上げてオーイ、
 アツボ、と云ふて招いたら敦盛様
 が遊ぶときかさしやつたかして、馬
 のすこたんちよいと、こつちやむけ
 て、ヤツシヨゴラ、砂場へ上ら
 つしやつた、そしたら熊次郎が脇差
 の長いのをちらつと抜いた、敦盛さ

んもすつとぬいた、ヤ丁々ヤチヨ
ン、してこい、と云ふて馬の上
から二人乍ら飛んで下りた、敦盛さ
んも嫌になつたかしてチンと座らつ
しやつた、熊公めが、ニヤコンダノ
云ひよつた、人違ひしたらども
ならんと思ひよつたかして、こちら
向いて顔みせとこない云ふとる、こ
ちらむけ、と云ふたら敦盛さんが
いやそちらはむかんの太夫ぢやと云
はしやつた、ハハ、ハハ、マアえ、
わ、え、わ、と辨當食ひかけたら
アリヤ首がころりと落ちた、俺はび
つくりして辨當ふみくだいて小便ち
びつた、ハハ、ハハ、オ、その時
ぢらしいのはアリヤ何とやら云ふお
姫様ぢやあつたの、ヲ、何でも拳の
中にある名ぢや、エ、そんなら一拳
いかうかい、オ、さつまで行こて、
一、二、りゆう、ちえい、たま……

オ、たま、玉織とやらいふ内裏上
臈も殺されて居たげなと、聞いて御
台は、詞ヤア、なにて敦盛は討
たれしとや、福原の館にて母様御無
事でおさらばと玉織諸共いさぎよう
いうたが此世の暇乞、長い別れに成
つたかと、ありし事どもくどき立て
人目も恥ぢぬ叫び泣き、前後不覺に
見えにける、詞イヤこれ親仁殿、合
點のいかぬ事がある、死なしやつた
敦盛様がああ笛の主なれば、こなた
に石塔誂へたお若衆と一つぢやない
か、いかに、サ其死んだ人が來
さうなものぢやないぞや、いかに
も、ハ、ア聞えた、さつきに爰迄連
立つて來て、あの、物のいふ中掻消
す様に見えなんだは、扱は幽霊であ
つたよなと、いへば皆々興ざめ顔、
御台は猶も悲しさの、思ひいやます
御歎き、小雪も始終を聞くにつけ、

儂い事やとばかりにて、フシ 俱に袂
をしぼりける、折ふし遙の松蔭より
馳け來る大勢彌陀六が、あれこそ慥
に追手の者、先づ、あなたを隠す
に幸ひ、此石塔の後へと、フシ 御台
の手を取り忍ばせて、詞何と思やる
いづれも、追手の奴等が此所をすな
ほに通ればあなたの仕合、若しも何
かと意地張らば、是迄平家の領地に
住んだ御恩の爲、何も一働せうぢや
ないか、ヲ、サてん手に鋤鋏の、背
打くらはせぶひまくと、いふ間も
あらせず砂煙蹴立て踏立てかけくる
は、梶原が郎等番場の忠太、須股運
平先として數多引連れつゝと寄り、
詞コリヤ、百姓ども、この所へ卅
餘りの女の玄妻、エコウ赤金襴の鉢
巻を着致し、赤金襴の打掛を着致し
赤金襴の着物を着致し、赤金襴の帶
を着致し、赤金襴の胴着を着致し、

赤金襦の長襦袢を着致し、赤金襦の肌襦袢を着致し、赤金襦のゆまきを着致し、赤金襦の足袋を着致し、赤金襦の草履を着致し、赤金襦の後掛を着致してこの所へ着致したで有らう、サア着々々々着ぬかせ、ちやく姓ども、仰山な着ぢやなあ、おれやびつくりして着が起つた、ヤア何馬鹿な、ヘイそれや着致しましたことは着いたしましたれど、お前様が着々云ふてござる間にもう二三里も向ふへ着致しましてござりませう、追手の衆なら一足も早うござれ〜とフシ急すれば、扱こそ遁すな皆來いと、駈出すふりにて立留り、運平が耳に口、牒し合せて木蔭に残し、濱邊をさしてかけり行く、跡打眺めサア樂ぢや此間に早うと御台を出し、詞コリヤ〜娘、あなた一人は覺束ない、寺迄送つて内へいね、ちやつ

と〜といふ所へ、思ひがけなき木蔭より須臾運平飛んで出で、詞ヤアどこへ〜からあらうと推量し、忠太が我を残し置かれた、サ、早う御台を渡せ、邪魔ひろぐとかたつばしそつ首ころり打落す何と〜と罵れば、百姓共せよら笑ひ、詞コリヤやい、そつ首のそつくひのと、わいらがほでの動く間にうつかりとして居ようかい、サア相手仕事ぢや手早にこいと、てん手に鋤鉞大熊手、打つてかゝれば運平始め數多の家來も一同に、フシ拔連れ〜渡り合ひ、打合ふ隙に彌陀六が、ソレ御台様逃げた〜、娘も逃げよとあせる中、元來達者の百姓ども、腕先揃へて連枷打、かたはし家來を打毆り、運平を追取巻き、詞投げたり踏んだり蹴飛ばしたり寄つてかゝつて打叩く、急所にや當りけん、うんと仰向に反返れ

ばソリヤ死んだはと逃行く家來、又追つかくるを彌陀六が、コレ〜待つたと呼返し、詞御台の難儀を救ふ爲、ぼつ散らす計りでよいにア、死んだりや尻がむつかしい、サア皆ござれといふ所へ、駈つて來る庄屋の孫作死骸見付けて扱こそ〜、詞一人も散らす事ならぬぞや、コレ皆よろ聞きやれ、今梶原様の郎等番場の忠太といふお侍がござつて、百姓共が狼藉し家來運平を殺したる由憎いやつ、殘らず引立て來るべしと嚴しい言付、ア、ひよんな事しておらに迄厄介をかける、遅なはつたら猶こはい、サア〜おぢやといふに皆々尻込の中に彌陀六進み寄り、詞殺したと聞かしやつたは大きな間違ひ、ありや目が眩うて死んだのぢや、其證據にはソレ、死骸に一つも疵がない、ムウそれが定ならおらも嬉しい

ドレ〜と身體を改め、詞ほんにどこにも疵はない、こりやあつちのが大きき龜相、ハテそち達が殺さぬからは何のこはい事はない、此中でよろ物いふ者たつた一人居て、さつぱりと言譯けすりや濟む事ぢや、ほんにさうぢやハア誰がよからうなア、いやこれ年の功ぢや彌陀六いかしやれ、イヤ行く分は構はぬがおりや口癖の念佛が邪魔に成つてどうもならぬ、そんなら此庄屋が指圖せう、日頃ちよびくさようしやべる雀の忠吉やらうかい、イヤわしやあんまり口早で何のこつちや譯が知れまい、扱はびしやの五太左衛門かい、おりや聲が鼻へ入るぞ、というて丹兵衛は咽がごろつく、與次郎は齒脱なり、指詰又平おいきやれ、イ、いやコ、こちやド、どもりますわいの、ハテ扱其様に讓合つては埒が明かぬ、幸

ひ爰に石を運んだ繩がある、是でくじ取したらよからう、ヲ、そりやいやおういはさぬやう此庄屋がしてくると、フシ手早に繩切り後でもちやくちやひん握り、詞コリヤ結んだのを取つた者がいくのぢやぞ、サアとれいもよ、ヲウト市鼻どれとりやる西國廻つて見ねとてん手に繩先引つばれば、詞ハア頭數よんでしたがコリヤ一筋餘つたわ、ハテそりや親の繩ぢや庄屋殿とらしやれ、ほんにさうぢやおれが取る、サア引け〜かたはしからいなしてくりよ、ヤすつとせい〜、いア悲しや結んだのはおれぢやあつた、サア庄屋殿いかしやれ〜、イヤ待てよ、おりやいかう筈がない、デモくじが當つたものそんなら今一べん仕直しぢや、そんなきたない事云はすないので、お前が云ひ出したんぢやがな、おいらが様

な百姓になつてゐて言ひ譯けして下さんせ、さゝお頼み申しますと引立てられ、われは幸ひ百姓共の畑姿を我が姿と歎打ちかたげ立ち上りしかねて弱氣のお庄屋が歎き、これ申シア、お氣毒なとばかりにて何のくもなく行く親父、言譯け心ぞいぢらしき、皆々逃れこそこそと逃げゆく足もチョコ〜走り、鬨くちに當りて一人行く心の内こそおかしけれ。



ゆき

熊谷陣屋の段

中 竹本大隅太夫
豊澤廣助
切 豊竹古鞆太夫
鶴澤清六

人形

妻相 模 吉田文五郎
堤軍次 桐竹紋司
熊谷次郎直實 吉田榮三
藤の局 吉田小兵吉
源義經 桐竹紋太郎
梶原平次景高 吉田玉市
石屋彌陀六 吉田玉藏
百姓 大ぜい
軍兵 大ぜい

(床本) 熊谷陣屋の段(中)

行空もいつかはさへん須磨の月、平家は八嶋の浪に漂ひ、源氏は花の盛りを見る中に勝れて熊谷が陣所は須磨に一構、要害厳しき逆茂木の中に若木の花盛り、八重九重も及びなき夫かあらぬか人ごとくに熊谷櫻といふぞかし、花おらせじとの制札を讀で行人、讀ぬ人、一つ所に立集り、扱も咲たり、花より見事な此制札に辨慶殿の筆じやがな、扱も見事、一つも讀めぬ、ヲ、あれはの義經様、此花を惜み、一枝切らば指一本切べしとの法度書、ヤア花のかはりに指きるとは首切下地、ヲ、こはや見て居る中も虎の尾を踏む心地する、皆ござれと花に嵐の臆病風ちり、こそ別れ行、はるくと尋ねて爰へ熊谷が妻の相模は子を思ひ、夫思ひ

の旅姿、陣屋の軒を爰やかしこと尋しが、暮に覺への家の紋、嬉しや爰と内に入り折節家の子堤の軍次立出て、是は、奥様か、ヲ、軍次そなたも息災さふな、マアめでたい、熊谷殿や小次郎もかはる事はないか早ふ逢たい逢せてたも、ハア旦那は今日御廟参り、小次郎様は先頃より御前つとめで御下りなし、マア、長の御旅路お勞をお休めと挨拶とり、なる所へ敦盛卿の御母藤の局虎口の難を遁れきて、こけつ轉びつ花の影、陣屋をめがけ走り付、後より追手のかゝる者、影を隠して賜はれとけはしき體に驚て、相模は傍へ走寄、見るに見かはす互の顔、ヤアお前は藤のお局さまではないか、そふいやるそなたは相模じやないか、テモ久しやなつかしいお床し様やと手を取てマアこなたへと伴ひ入る、し

たしき體に心をきかし軍次は勝手へ入りけり、相模はやがて手をつかへ誠に一昔は夢と申す處、大内に御座遊ばず時勤番の武士佐竹次郎殿と馴れ初め御所を抜け出東へ下り、お前様のお身上を承はれば御懐胎のお身ながら平家の御家門參議經盛様方へ縁付賜ふとの噂、其折は世盛りの平家御威勢はますくと影ながら悦びましたに、此度源平の戦ひ御一門もちりくと間に付ア、此藤の方様は何となされた、どふ遊ばしたと、一人苦にしておりましたに、マア御機嫌なお顔を見て、おめでたやお嬉しやヲ、そなたも無事でマア嬉しう懐胎で出やつた時の子は娘ごぜか男か、アノ息災で育つて居るか一寸寄ても女同士問ひつ問はれつ年月に積る言の葉くり返し、嬉し涙の種ぞかし、藤の方涙ぐみ世の盛衰はぜひもなや

其時に産落したは無官の太夫敦盛とて器量發明揃ふた子を今度の軍に討死させ、夫は八嶋の波に漂ひ、我のみ殘る憂難儀淺まし身のう上とかこち賜へば、ヲ、お道理と以前御恩も有り、連合にも語りお身の片付後世の營お心任せに致しませふ、以前は佐竹次郎と申て北面同然の武士只今にては武藏國の住人私の黨の旗頭熊谷次郎直實と人も知た侍と聞より御臺はヤアそなたの連合の佐竹次郎、今では熊谷次郎と言ふか、アイスリヤアノ熊谷次郎はそなたの夫よな、ハア、はつと吐胸とむねの氣をしづめ何と相模以前大内にて不義現はれ、佐竹次郎と諸共に禁獄させよとの院宣、自が申宥め御所の御門を夜の内に落してやつたを覺へてか、アツア其時の御恩何の忘れませふぞいな、ム、其恩を忘れずば助太刀してそち

が夫熊谷を自に討してたも、エ、イそりや又何のお恨みで、サア最前も咄した院の御所のお胤、無官の太夫敦盛をそちが夫熊谷が討たはいの、エ、そりやマア誠でござりますか、スリヤそなたは何にもしらぬか、サアはるんと東より今來て今の物語聞て吐胸とむねの誠しからず、追付夫が歸り次第、様子を尋る其間、暫くお控へ下されと、詞を盡し理を盡しなだむる折に、表より梶原平次景高所用有て推參と呼はる聲、ヤア何梶原とや見付られてはお身の大事、まづとこちへと御臺の手を取、一間へ伴ひ入にける、程も有せず入來る梶原平次景高我意につのる權柄顔、挨拶もなく座に付けば、堤の軍次立出、今日は主人直實志有て廟參り、御用あらば某に仰置かれ下されたしと地に鼻付ければ平次景高、ナニ熊谷殿

は他所とな、ソレ家來共其石屋の親仁め引立てきたれ、はつと答へて科もなき白毫の彌陀六を平次が前に引据れば、ヤイなまくら親仁め、儂れ何者に頼れ敦盛が石塔は建たやい、平家は残らず西海へぼつ下し、誂らゆべき相手なければ、祭するところ源氏方の二股武士が頼しに違ひは有まいサア眞直に白狀ひろげ偽ると鉛の熱湯脊骨を割て流し込とおどしかけても正直一遍テモ扱も御無理な御詮議先程も申た通り、石塔の誂人は敦盛の幽霊、五りんの事は扱置一厘も手附は取ず建ると其儘石塔の喰逃げせめて人魂でも手附に取たら小提灯のかはりに致しませふに、冥途へ書出しはやられず、本の是がそんしやうぼだい有様の申上願以此功德施一切此通りでございしますと取じめな

さ、ア、何おつしやつても棟に釘と

軍次が詞に平次は悪智恵、大かた石塔を建させたわるも合點く、熊谷戻らば三つ鐵輪の詮議、先そやつめを引立來れと一間へ入れば、家來共石屋の親仁を無理やり引立奥へ連れて。

(床本) 熊谷陣屋の段 (切)

ゆく、相模は障子押開き日も早西に傾ぶきしに夫の歸りの遅さよと待つ間程なく熊谷次郎直實花の盛りの敦盛を討て無情を悟りしか、追に猛き武士も物の哀れを今ぞしる思ひを胸に立歸り、妻の相模を尻目にかけて座に直れば、軍次は頓て覆に成り先達て平次景高殿何か詮議の筋有とて御影の石屋を引連御出有り、奥の一間に御待ちと委細を述べれば、ムウ詮議とは何事ならん、先其方は一獻を催し梶原殿を饗し申せ、サア早く

行けく、ハテ扱何を猶豫すると叱りちらされせひなくも相模に顔を見合して心を残し入にけり、後見送つて熊谷、コリヤ女房わりや爰へ何しに來たやい、國元出立の節陣中へは便りも無用と堅く言付置たるに詞を背くといひ剩へ女の身で陣中へ來る事不届至極の女めと不興の體に相模は、もぢく、其お叱りを存じながらどふか斯かと案じるは小次郎が初陣一里往つたら様子が知れふか、五里來たら便りが有かと、七里歩み、百里餘りの道をツイ都までホ、ホ、ホ、ヲ、しんき登つて開けば一の谷とやらで今合戦の最中と、取々の噂さ故、子に引されるは親の因果、御了簡なされ下さりませ、マア小次郎は息災で居ますかと、問ば、熊谷詞をあらゝげ、戰場へ趣くからは命はなきもの、堅固を尋る未練な性根、若し

討死したら何とする、いゝえいな小次郎が初陣によき大將と引組んで討死でもいたしたら嬉しい事でござんしよと、夫の心に隨ひし健氣な詞に顔色直し、ホ、先小次郎が手柄といへば平山の武者所と争ひ抜がけの功名軍門にかけ入ての働き、手きづ少々負たれ共未代まで家の譽れ、エ、シテ其手疵は急所ではござりませぬか、ソ、ソレ〜まだ〜手疵を悔む顔付、若し急所なら悲しいか、イ、エ何のいなかすり疵でも負ふ程の働らきは出かしたと思ふて嬉しいかの餘りお尋ね、其時お前も小次郎と一所においでなされたか、ホ、危しと見るより軍門にかけ入り小次郎をむりに引立、小脇にひんだき我陣屋へ連かへり、某は其軍に搦手の大將無官の太夫敦盛の首取たりと咄しに、扱はと驚く相模後に聞き居る御臺所我

子の敵と有あふ刀熊谷やらぬと抜く所鎧纏んでヤア敵呼はり、何やつと引寄するを女房取付ア、コレ〜聊爾なされなあなたは藤のお局様と聞て直賞恟りし、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ア、コハ〜思ひがけなき御對面と飛退敬ひ奉れば、コリヤ熊谷軍の習ひとは言ひながら年はも行かぬ若武者をよふむごたらしう首討たな、サア約束じや相模助太刀して夫を討せサ何と〜と刀追取せり付け賜へばアイあい〜と返事も胸にせまりながら、エ、コレ直實殿、敦盛様は院のお胤と知りながらどふ心得て討しやんした様子が有ふ、其譯をと言もせつなきうる〜涙ヤアおるか〜此度の戦ひ敵と目ざすは平の宗盛、夫に隨ふ平家の一門敦盛は扱置、誰彼と鎧を削るに用捨がならふか、イヤノウ藤の御方様、戦場の儀は是非

なしと御諦め下さるべし、が其日の軍のあらましと敦盛卿を討つたる次第物語らんと座をかまへ、扱も去る六日の夜早や東雲と明くる頃、一二を争ひぬけがけの平山熊谷討ち取れと切つて出たる平家の軍勢、中に一際勝れし緋威、さしもの平山あしらひ兼ね、濱邊をさして逃出す、ハテ健氣なる若武者や逃る敵に目なかけそ熊谷是に控へたり返せ戻せヲ、イ〜と扇を持つて打招けば、駒の頭を立て直し、波の打物二た打三打、いでや組んと馬上ながらむんづと組兩馬が間にどふと落ち、ヤア〜何と其若武者を組敷てか、されば御顔をよく見奉ればかみ黒々と細眉に年はいざよふ我子の年ばい、定めて二親ましまさん、其歎きはいか斗りと子を持つたる身の思ひの餘り上帯取つて引立塵打拂ひ早落賜へとすゝ

めさしやんしたかそんなら討ち奉る
 お心ではなかつたの、ヲ、サ早落ち
 賜へとすゝむれど、イヤ一旦敵に組
 しかれ、何面目にながらへん、早首
 取れよ熊谷、ナニ首取れといふかい
 の、健氣な事をいふたなふ、サア其
 仰せにいとゞ猶涙はむねにせき上し
 まつ此通りに我子の小次郎、敵に組
 れて命や捨ん淺ましきは武士の習ひ
 と太刀も抜きかねしに逃さつたる平
 山が後の山より聲高く熊谷こそ敦盛
 を組敷きながら助くるは二心に極り
 しと呼はる聲に、ハ、アせひもなき
 次第かな、仰せ置るゝ御事あらば言
 傳へ參らせんと申上れば、御涙を浮
 べ賜ひ父は波濤へ趣き賜ひ心にかゝ
 るは母人の御事、きのふにかはる雲
 井の空、定めなき世の中をいかゞ過
 ぎ行賜ふらん、未來の迷ひは一つ熊
 谷頼むの御一言、是非に及ばず御首

をと咄す中より藤の局、ナフ左程母
 をば思ふなら經盛殿の詞に付き、な
 ぜ都へは身を隠さず一の谷へは向ひ
 しぞ、健氣によらふた其時は母も俱
 々悦んですゝめてやりし可愛やな覺
 悟の上も今さらに胸もせまつて悲し
 やと、くどき歎かせ賜ふにぞ、御尤
 とは思へ共、相摸はわざと聲はげま
 し、イヤ申しお局様御一門残らず屋
 嶋の浦へ落行きたまふ中に一人踏と
 しまり討死なされた敦盛さま、數萬
 騎にすぐれた高名、但し逃延び身を
 隠し人の笑ひを受賜ふがお前の氣で
 は嬉しいか、御未練な御卑怯なと諫
 めて熊谷、ヲ、出かいたゞ、コリ
 ヤ女房御臺所此所にござ有てはおた
 めにならぬ、片時も早く何方へも御
 供せよ、サア、早く行け、我
 も敦盛の御首實檢に備へんヤア、
 軍次はおらぬか、早來れと呼はる聲

と諸共に一間へこそは入相の鐘は無
 常の時をうつ、陣屋々々の燈火にい
 とゞ悲しき、藤の方、ア、思ひ出せ
 ば不便やな、今はの際迄も肌身はな
 さず持つたるはコレ此青葉の笛我と
 我が身の石塔を建て貰ふた價にと渡
 して置いた此笛のわが手に入しも親
 子の縁、こんばく此世に有るならば
 なぜ母には見へぬぞ聞へぬ我子やな
 つかしの此笛やとはだに付け身にそ
 へて盡せぬ思ひやるせなき、コレ申
 し其笛がよい御篋、經陀羅尼より笛
 の音を手向るが、直ぐについでん敦
 盛様のお聲をば聞と思ふて遊ばせと
 すゝめに隨ひ藤の方、なみだにしめ
 す歌口も、ふるふて音をぞすましけ
 る、親子の縁の絆にや障子にうつる
 かげらふの姿は慥敦盛卿、藤の局は
 一と目見るよりヤレなつかしの我子
 やとかけ寄り賜ふを相摸は抱き留め

ア、コレ申し香の煙りに姿をあらはし、實方まじりたは死で再び都へ歸りしも一念のなす所、有るまい事にはあらね共いぶかしき障子の影殊に親子は一世と申せば御對面遊ばせば御姿は消失ん、イヤなふ四十九日が其の間たましい宇宙に迷ふと聞、せめては逢て一言をと振放し、障子ぐらりと明け賜へば、姿は見えず緋威の鎧ばかりぞ残りける、ハツト計りに藤の方、相模も俱に取り付いて、扱は鎧のかげなるか戀しと迷ふ心からお姿と見へけるかと俱にこがれて正體も泣きくどくこそ哀れなれ、時刻うつると次郎直實首桶携へ立出れば相模は夫の袂を控へ、コレ申し是が親子御一生のお別れ、せめて御首に成り共御暇乞と願ふにぞ、藤の局も涙ながら、ノウ熊谷そちも子の有る身でないか、野山の猛き獸さへ子を

悲しまぬはなきものを親の思ひを辨へて、情に一と目見せてたもと、すがり歎かせ賜へ共、イヤ實檢に備へぬ中は内に見んは叶はぬとはね退突退け行く所に、ヤア、熊谷、暫し、敦盛の首持參に及ばず、義經是にて見やうずるはと、一と間をさつと押しひらき立出賜ふ御大將、ハ、ハ、はつと次郎直實思ひ寄らねば女房も藤の局も諸共にあきれながらに平伏す、義經席に着賜ひ、ヤア直實首實檢延引といひ軍中にて暇を願ふ汝が心底いぶかしく、密に來りて最前より始終の様子は奥にて聞く、急ぎ敦盛の首實檢せんと仰を聞くより熊谷ははつと答走り出、若木の櫻に立おきし制札、引抜き恐れなく、義經の御前にさし置き、先つころ堀川の御所にて六彌太には忠度の陣所へ向へと花に短尺又此熊谷には敦盛の首

取れよとて辨慶執筆の此制札、則ち札の面の如く御諒に任せ敦盛の首討ち取たり御實檢下さるべしと蓋を取れば、ヤア其首はとかけ寄る女房引き寄せて息の根とめ御臺は我子と心も空立寄り賜へば首を覆ひ、コレ申し實檢に備へし後はお目にかけるこの首、イヤサコレお騒ぎ有るなと、熊谷がいさめに追はしたなふ寄るもよられず悲しさのちぎに碎くる物思ひ次郎直實謹んで敦盛卿は院の御胤此花江南の所無は則ち南面の嫩、一枝を切らば一指を切るべし、花によそへし制札の面察し申て討たる此首御賢慮に叶ひしか、但し直實誤りしか御批判いかにと言上す、義經欣然と實檢まし、ホ、花を惜む義經が心を察し、アよくも討たりな敦盛に紛れなき其首、ソレ由縁の人も有るべし、見せて名残を惜ませよと仰を

聞よりヨリヤ女房敦盛の御首ソレ藤の方へお目にかけよ、アイあいとばかり女房はあへなき首を手に取上、見るもなみだにふさがりて、かはる我子の死顔に胸はせき上、身もふるはれ、持つたるくびのゆるぐのをうなづく様に思はれて、門出のときにふり返り、につと笑ふた面ざしが、有ると思へば可愛さ不便さ、聲さへのどにつまらせて、申し藤の方様御歎き有た敦盛様の此首、ヤア是はサイナア、申しこれよふ御覽遊ばしてお恨みはらしよい首じやと譽ておやりなされて下さりませ、申し此首はな私がお館たで熊谷殿と忍び逢ひ懐胎もろちながら東へ下り、産落したはナコレ此敦盛様、其節お前も御懐胎誕生有りし其お子が、無官の太夫様、兩方ながらおなかに持ち國を隔て、十六年、音信不通の主従がお役に立た

も因縁かや、せめて最期は潔う死なされたかと、恨しげに問へど夫は隣もせん方涙御前を恐れ餘所に言ひなす詞さへ、泣音血をはく思ひなり、藤の局は御聲くもり、ナフ相模今の今迄我子ぞと思ひの外、な熊谷の情そなたは嘸や悲しかる、斯した事とは露しらず敵を取うの切うのと言た詞が恥しい、我子の爲には今の親コレゝ忝いと手を合せ、是に付けてもいぶかしきは此濱の石塔敦盛の幽霊が建させたとの噂と言ひ、秘藏せし青葉の笛、石屋の娘が貰ひしとして我手に入、最前其笛吹いた時あの障子にうつりし影は慥に我子と思ひしが詞もかはさず消失しはアイヤ其笛の音を聞てかけ出し、敦盛の幽霊。人目有りと引きとどめ、障子越しの面影は義經が志しと聞て、御臺は我子の無事悟りながらも箒木の有とは

見えて、隔てられ又も涙にくれ賜ふ折ふし風に誘はれて耳を突抜く法螺貝の音かまびすく聞ゆれば、義經は勇み立ち、ヤアゝ熊谷着到知せの法螺の音、出陣の用意々々と仰に直實畏まり、念き一と間へ入にけり、最前より様子聞居る梶原平次一間の内より躍り出で、斯あらんと思ひし故石屋めを詮議に事寄せ窺ふ所、義經熊谷心を合せ敦盛を助けし段々鎌倉へ注進と言捨かけ出す後よりはつしと打つたる手裏劍は骨を貫く銅鐵はがねの石鑿、うんと斗りに息絶る、スハ何者と云中に立出る石屋の親仁ハ、アお前方の邪魔になるこつばを捨て、上げました、扱幽霊の御講承つて先づ安堵もうお暇と出行を、ヤア待、親仁ヨリヤ彌平兵衛宗清までと義經の詞に惻り、はつと思へどそ知ぬ顔ハレヤレマとつけもない御影の里に

隠れない白毫の彌陀六といふへ、
ン男でえすハ、誠や諺にも
至つて憎いと悲しいと嬉しいとの此
三つは人間一生忘れずといふ其昔母
常磐の懐に抱かれ伏見の里にて雪に
こゝへしを汝が情を以て親子四人が
助かりし嬉しさ、其時は我れ三歳な
れ共、面影は目先に残り見覺有り、
眉間のほくろナコリヤ隠してもサ隠
されまじ、重盛卒去の後は行方知ら
ずと聞しがハテ堅固で居たな満足や
と聞より彌陀六つかくと立寄り、
義經の顔穴の明く程打眺め、テモ恐
しい眼力ぢやよな、老子は生れなが
らにさとく、莊子は三ツにして人相
をしると聞しが、かく彌平兵衛宗清
と見られた上はエ、義經殿其時こな
たを見遣さずば、今平家の楯籠る鐵
拐が峰鶯越を攻落す大將はサ有るま
いもの又池殿と言ひ合はせ頼朝を助

けずば平家は今に榮んもの、エ、宗
清の一生の不覺、是に付けても小松
殿御臨終の折から平家の運命末危し
汝武門を遁れ身をかくし一門の後弔
へと唐土育玉山へ祠堂金と偽はり、
參千兩の黄金と忘れがたみの姫君、
一人預り御影の里へ身退き平家の一
門先立ち賜ふ御方々の石碑播州一國
那智高野近國他國に建置し、施主の
知れぬ石塔は皆コレ彌平兵衛宗清が
涙の種と御存じ知らずや、今度敦盛
の石塔眺に見へし時も御幼少にて御
別れ申せし故、御顔は見覺ねえ共、心
得ぬ風俗はイヤ世を忍ぶ平家の御公
達ならんと思ふより心よく受け合し
が、扱は命にかはりし小次郎が善提
の爲、此濱の石塔は敢盛の志にて
有けるか、ハツエいかに天命歸すれ
ばとて我助けし頼朝、義經この兩人
の軍配にて平家の一門御公達一時に

亡ぶるとはハア、是非もなき運命や
な、平家の爲に獅子身中の虫とは我
が事、さぞ御一門陪臣の魂魄我を恨
まん淺ましやと或は悔み、或は怒り
涙は瀧をあらそへり、元來さとき大
將義經ヤア、熊谷障子の内の鎧櫃
ソレこなたへはつと答へて次郎直實
出陣の出立ちと好む所の大あらめ鐵
形の兜を着しか、へ出たる鎧櫃、御
目通りに直し置、コリヤ親仁其方が
大切に育る娘へ此鎧櫃届けてくれよ
コリヤ彌陀六ヤア彌陀六とはフウ宗
清なれば平家の餘類源氏の大將が頼
むべき筋は、ム、面白い彌陀六め頼
れて進せましょ、したが娘へは不相
應な下されものマア内は何でござり
ます、改て見ませふと蓋押し明くれ
ば敦盛卿ノウなつかしやと藤の方か
け寄り賜へば蓋びつしやリイヤ、
此内には何にもないゾ、

マ何にもないぞ、ハア是でちつと虫
 が納つた、イヤナフ直實殿への御禮
 はコレ、この制札一枚を切らば一
 子を切てへツエ忝いといふに相模は
 夫に向ひ我子の死んだも忠義と聞け
 ばもふ諦めて、居ながらも源平と別
 れし中どふしてまあ敦盛様と小次郎
 を取替やうが、ハテ最前も咄した通
 り手負と偽り無理に小脇にひつ挟み
 連歸つたが敦盛卿又平山を追つか
 出たを呼かへして首討つたのが小次
 郎さ知れた事をと鋭なる咄しに相模
 はむせび入りエ、胴怒な熊谷殿こな
 た一人の子かいのふ逢はふ、と樂
 んで百里二百里來たものをとつくり
 と譯も言はず首討たのが小次郎さし
 れた事をともぎどふに叱る斗りが手
 柄でもござんすまいと聲を上げ泣き
 くどくこそ道理なれ、心を波で御大
 將勇みを付けんとヤア、熊谷西國

出陣時移る用意如何と仰に直實恐れ
 ながら先達で願ひ上し暇の一件、か
 くの通りと兜を取れば切拂ふたる有
 髮の僧、義經も感心有り、ホ、さも
 有なんソレ武士の高名譽を望むも子
 孫に傳へん家の面目、其傳ふべき子
 を先き立て軍に立ん望みはホウ尤コ
 リヤ熊谷願ひに任せ暇を得さするぞ
 よ、汝堅固に出家をとげ父義朝や母
 常磐の回向も頼むと、したしき御説
 ハ、ア有りがたしと立上がり上帯を
 引ほどき鎧をぬげば袈裟白無垢、相
 模是はと取付をヤア何驚く女房、大
 將の御情けにて軍半に願ひの通り御
 いとまを賜はりし我本懐、熊谷が向
 ふは西方彌陀の國、悴の小次郎が拔
 駈けしたる九品蓮臺一つ蓮の縁を結
 び今より我名も蓮生と改めん、一念
 彌陀佛、即滅無量罪。十六年も一昔
 シア、夢であつたなど、ほろりとこ

初笑は大阪名物爆笑劇團

松竹家庭劇

元旦初日

吉例晝夜二部興行
 (九日より晝夜狂言人替)

① ② ③ ④ ⑤

(ヒルの部)

娘 劍 舞 二場

ふりつむ雪 二場

大陸の黎明 三景

清水の休業 二場

炭屋の休業 三場

(ヨルの部)

鐵砲勇助 一場

結婚超特急 二場

愛妻事變公債 三場

丘の一本杉 二場

やぶれ三味線 一場

櫻 五 十 錢
 菊 八 十 錢
 一等席 一 圓 三 十 錢
 二等席 二 圓 二 十 錢
 (他に入場税金等二圓)

大阪歌舞伎座

ぼす涙の露、柎に置く初雪の日影にとける風情なり、長居は無益と彌陀六は鎧櫃にれんじやくをかけた思索のしめくまり、コレく義經殿もし又敦盛いき返り平家の殘黨狩集め恩を仇にてかへさばいかにヲ、其こそは義經や兄頼朝が助かりて怨を報ひし其如く天運次第うらみを請けん、げに其時は此熊谷浮世を捨て、互

不隨者と源平兩家に由縁はなし、互ひに争ふ修羅道の苦患くげんを助ける回向の役、ヲ、サ此彌陀六は折を得て又宗清と心の還俗我は心も墨染の法然を師と頼み、おしへを請ん、いざさらば、君にもますく御安泰おいとま申すと夫婦連、石屋は藤のおつぼねを伴ひ出る陣屋ののき、御縁が有らばと女同士、命が有らばと男同士、堅固でくらせの御上意にハ、ハ、ハ、有がた涙名残りの涙、又思ひ出す

小次郎が首を手づから御大將此須磨寺に取おさめ末世末代敦盛と其名はくちぬ黄金札、武藏坊が制札も花をおしめどはなよりも惜む子を捨、武士を捨、住どころさへ定めなき有爲轉變の世の中やと互ひに見合す顔と顔、さらばくおさらばの聲も涙にかきくもり、別れてこそは出でて行く。

演公春初・部藝演マネキ興新

元旦初日

實演

森の石松 二景

羅門光三郎 出演
伴淳三郎

半島幸樂藝術の最高峰

朝鮮樂劇團公演

「迎春賦」全十四景

新舞踊

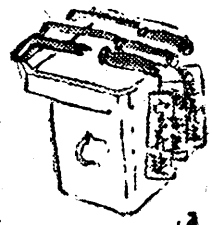
迎春踊りとともへ

浅野八重子
浅野百合子
河合よし子

松慶家 一奴 梅津津 虎の子
祇園 さくら 梅津津 香丸
桂 春多樓 山田村 豊丸
ナガタ 綾子 花柳 豊丸
大町 和呂 花柳 豊丸
梅乃小町 醉月樓 染丸
ミクスワ 一力 三郎
玉松 一力 三郎

どうとんぼり

浪花座



ほろ

新曲 三人片輪

有 啞 盲 覺
德 人 目

野鶴豊鶴鶴鶴豊竹竹豊竹豊竹
澤澤澤澤澤本本本本本本
吉清新友重道和南伊呂相呂相
太衛 太泉部達太生太夫
藏友郎門造八夫夫夫夫夫夫

人 形

德 目 人

吉桐吉吉
田竹田田
榮紋玉五
三郎幸郎

鶴澤 道八調
株茂都陸平振附

新曲 三人片輪

船岡長者が施行の爲め、片輪を召し抱えると聞き偽者の盲と啞と覺が舞ひ込んで長者の留守にさんさん酒藏から酒を呑んだりしてをる處へ急に長者に歸られて大混亂、遂に馬脚を現すといふ所作事であります。

(床本) 三人片輪

千早振るへ遠き神代も偲げるへ、里は静けき朝の雪へ八聲の鶏に豊かさのへ恵みを頼む門松やへいく十かへの春ぞ迎へん。

詞まかりいでたるものはこのあたりのへうとく人でござるへそれがしもへちと心願の御座つてへ片輪ものをへ多勢召抱へようと存じへ此程京洛中に高札をたてさせへそのよ

しを知らさしめられたれば、やがて片輪者がまゐることとござらう、まづこの所にて相まち申そう盲人梅が香やのつと日の出る山路には、人よりさきへかほりはすれど、さて櫻花合山吹のその美しさどこへやら合見得ぬ盲の垣のぞき、耳は人より早咲にたよりもとめてあゆみより、詞ものもふ主人表に案内がある案内とはたそ盲ハア私は高札の表によつてまゐりました片輪ものゝ座頭でござります主人ム、シテ座頭には高札の表についてわせられしか、盲人いかにも左様でござりまする、どうぞお抱へくだされませ 主人それはこの方に望む所ぢや、いかにも抱へてしんじようシテ和御寮は産れつきの盲目か、又は中年よりの盲目か、しさいくわしく語りませい、盲人ハイ此盲目になりましたそのわけは、申すもかなし

き物語、京の町にていつかどの、米を商ふ物もちも慾に目のなき柵目にて人のまなこをくらませし、その種の報ひ来て、たちまち曇るしんの闇、杖つきの、字あゆみかね、心の月は晴るれ共、晴れぬこの身の因果者、詞これにこりて其の後は、すつかり改心致しましたと、雨もつ空にうつくと、只うつむいてぞ居たりける、合啞折から爰へきよろくと羽ぬけの鴛鴦おしのそれならで、合みすぼらしげなるなりふりで、揃はぬ襟に札かけて啞の看板合押つけに、たどるのき端も縁のはし詞ア、主人これに啞と見ゆる、ふびんな者ぢや、コレ〜（指で字をかき乍ら云ふ）そなたは高札の表によつてまゐつたか、啞ア、主人そなたは何として啞にならしやつた啞ア、（指で字を書く）そもや我れ等が身の上は、彼の

鳥原の廓にて、夜毎淨かるゝ客衆を世辭で丸めて口車、合うてうてんつちりからの調子拍子に面白ふ、浮れ浮かれたむくひにて、今は因果のめぐり来て、ア、行末のはづかしや詞主人いかにふびんな者ぢや、此上は心をあらため、行末當家につかへませ、啞ありがたうムリます、主人是れはいかなことへ啞がものを申した、ハテ何とした何であらうぞア、さとつた、啞と申す者は、一代に一ち度嬉しさとかなしき時には、物を申すとうけたまわる、おゝかたそのことではなござらう。のふ〜そなたはあまりの嬉しきで、それで物が云はれましたか、啞ア、主人ア、もつともぢや〜、ア、あれ〜、またも向ふへ片輪者が参つたわ〜と、見やる向ふへ壁太郎助が、合嵐山から飛んで来るからす、羽根のつ

がひがうらやまし合そのつばさには引かへて壁近所々々、御近所近所、合心はせけどはかどらぬ、よろ〜、壁來りける、詞物もふ〜主人こんどは壁が参つた、ずつとこちへ通りませ、壁ハア心得てござります、ヤアツトナ〜、へエ、私は、高札の表についてまゐりました壁でござります、何卒お召抱へ下されますればこの上もなき仕合でござります。主人いかに抱へよう〜、シテそなたは、生れついで壁か、または中年よりの壁であるか、和御寮の身の上話しを語りませい、壁ハイ、しさいと申すも涙の種、過し昔は肩衣に槍一ト筋の身なりしも、曲る心に身を持ち崩し、親の意見のうるさしと、腹立ちまぎれに蹴かへせし、報ひはたちまちこの姿、天の御罪の恐ろしく、てんと改心致しましたと、

身の行末のあぢきなき語るを主人
 いてうとく人、思はず涙もらひ泣き
 ア、、(泣) 詞 扱ても、和御察
 は不仕合者ぢや、そのやうに改心致
 すと申すも、性は善なる人心、よい
 へ、今日より召抱へまするぞ、
 覺 そればせんばんかたじけなや、偏
 に御助々々と、手を合せたる嬉し泣
 き、主人 うとく人も、目をすり赤め
 詞 和御察達の身の上嘸しを承り、思
 はず貰ひ泣きを致してござる、いよ
 へ、此の方に抱へる上は、申つくる
 事こそあると片へに置きし三寶の、
 上に乗せたる藏の鍵、三ツ揃へて持
 つて出で、詞 ノウ、某四五日留り
 にて山一ツあなたへ行程に、そなた
 達に留守を申付る、先づいつち先き
 に抱へたる座頭にきくが、此留守中
 を何として守護いたすぞ、盲人 ハイ
 私ハ御覽の如く、かい目見えませぬ

が、耳は至つてよろしう御座る、蟻
 のはふ音までもわかります、もし盗
 人などはいりしなれば、かならず人
 に知らせます。主人 ヲ、夫れでよい
 へ、シテ啞どの、そなたはいかぢ
 ぢや、コレドウぢやどうぢやと申す
 に、ヤこれははしたり、そなたは啞で
 有つたものをアハ、、イヤコレ啞
 どの、某は用事あつて、山一つあな
 たへ四五日泊りてまゐる程に、留守
 中そなたに藏の番を申附るが、いか
 ぢ致して番をしまするぞ。啞 ア、
 、主人 何私は槍を心得て居りますに
 依つて、盗人がまゐつたれば、一ト
 突きに突止めます、アハ、、よ
 し、覺殿は何を心得居るぞ、覺ハ
 ア私は十三足三伏セの矢に、五人張
 りの強弓を曳きます、弓の名人でご
 ざります、モシ盗人が来りなば、射
 落してお目にかけます、主人 成程弓

の大名人とか、ム、是は覺でもさし
 つかへなく出来る事ぢや、まづ是で
 よいへ、此上申置く事は、ヲ、そ
 れ、早敷ふれば三年あと、風雨はげ
 しき闇の夜に合 見越しの松を足臺と
 なし合 忍び入つたる數多の盜賊、寶
 藏目がけ入りこみしが合 シヤござか
 しき振舞とたすき鉢巻身を固め合 討
 つて出づれば合 賊ははいもう、風に
 木の葉のちりへばツと、跡を見ず
 してにげうせたり、詞 何と某がうで
 の強さをかん心したか、覺、盲 驚き
 入りましてムります、主人 よしへ、
 然らば和御察達に申付くるは某やが
 て戻る迄、座頭には寶物藏の鍵を預
 る、盲人 ハアかしこまつてムります
 る。主人 啞お前には、酒藏の鍵を預
 る、しつかり番をさせうぞ。啞 ア
 、、、主人 その次は覺どの、
 そなたには金藏の鍵をあづくる。覺

ハア心得てムりますする。主人 皆々共にしかと申付けましたぞ。覺、盲畏つてござりまする。盲人 やがてお戻り成されませ。主人 ア、心得た。覺お留守は御氣使ひなされますなど、主人 詞にいそ〜うとく人、表をさして出て行く。三人 後に三人はホツと息つき、盲人 詞 扱も〜目のふちが痛くだるう成つた、是はチト目を開けて草臥を休めてくれう、ハアよい心持ちや、夜が明けた様で、此様にせい〜致した事は御座らぬ。啞エヘン〜久しぶり口を利いたら咽喉がせい〜と致して御座る。覺 扱も〜足がめり〜致した、ヤヤツトナア〜、よい心持ちやと、グツトのばした足の先。三人 三人顔を見合はして 詞 アハ、、、盲、啞 太郎助のか。覺 何ぢや半之亟どのにおまきどのかと、三人 あたりはどか

る者もなく、打くつろいで高笑ひ、アハ、、、詞 覺、是でいよ〜安心致した。盲、啞、そふ共〜盲人 シテ太郎助どの、何故當家へ抱へられたぞ。覺 さればいぬう、貴公達も知つての通り、不仕合が續いたによつて、高札を見て片輪を思ひ付き、いざつて參つた、シテ貴公達には。盲人 私も一生寝て居て食はふと盲目になつて參つた。啞 私しは又もと遊女であつた時、人をだましてほうだいに喋舌り散した其かわり、今度はだまつて食はふと思ひ、啞になつて來たわいなア。覺 いよ〜是で安心なれば、盲人 銘々あづかりの藏を明け、久し振の大酒盛り。啞 命のせんだくしませうと、三人 銘々うなづき三人連れ、藏まへさして入りにけるへ早や時も過ぎ銘々は、藏よりはこぶかず〜は、黄金の袋に賣

物つぽ口には銘酒がエンヤラヤ、二人があとおしエンヤラヤ、さても重いぞエンヤラヤエンヤラエンヤラえんやらや、三人 詞 アハ、、、啞 此の様な銘酒が此の藏にあらふとは此鍵番は知らなんだわいな、なんと皆さん久しぶりのお酒盛、はじめませうではあるまいか。覺 それがよい〜、まづ藏番のおまきどのから始めませい。啞 いえ〜まづ覺どのより、覺 エ、さよかそんなら吾等より下されうか、ヲツト御座ります、ちりますグウ〜、、、ハアよい酒ぢや、〜、アハ、、、さらば座頭へさしませう。盲人 エ、そんなら吾等かエへ、、、ありがたいわアハ、、、ありがたいわ、、、有難山吹鶯が、のぞをふくらしぐつと呑、ア、、、うまい〜、チウ〜、ハアよい酒ぢや〜

元旦初日

初日午後二時 二日午後三時
三日目より 午後四時開幕

谷崎潤一郎原作
川口松太郎脚色
喜多神紗郎演出

第一 春 琴 抄 二幕

吉屋信子作
脚本脚色
八田ツ夫演出

第二 村と兵隊 一幕

梶野千代作
脚本脚色
久保田万太郎演出

第三 小 指 四場

久米正雄作(大阪毎日新聞連載)
金子洋文脚色並演出

第四 白蘭の歌 三幕

京都南座

エイ、然らば啞殿、ササ、お酌をいたさう。啞ヲホ、そんならわたしもしよふばんと互ひに盃とりかはし。盲人さいつ、甃おさへつ、啞かづ重なりて、甃とろくく目、詞ナ、何んと兩人、よい心持になつたぢやないか、さしづめ啞のおまきどのゝかくし藝、おさかなに所望ぢや、くく、啞ヲホ、くく、そんなら私もはづかしながら昔おぼへし一ト振りを、歌三下りりんきさんすりやこちやあくまでもたてとほしたい戀の意地、出雲で結んだ縁ぢやもの、そふぢやあるまいか、合ちつとはするにならしやんせ、甃、盲人よいやくく、甃サアくくく、こん度は座頭どの、早ふくく、盲人ア、くく、まづ待たせられ、エ、こうつと、ヲ、それ歌見得ぬ盲目の空市どのが、田舎まわりになれくく犬が、すそをくわへてひきもどす、悪ぢやれしやる浮名の種よ、戀に目のない通りもの、はやし立てられはやされて、詞よいやくく、盲、啞サアくくく、こんどは甃どの、サアくく早ふくく、甃アコレくく、さなのたまひそ、只今つかまつる、ヤヤ、くく、くく、やつとなへよふたくく五人の中へ、小町一人を僧正遍照合吞めや唄へや座も色も、見立てらつらう、文屋がほらふくからに、どうか心も在原さんに思ひ出したらまつくろくろ主、合了簡ならぬと腹を立つみに世を宇治山の、喜撰茶にしてちやツと來なせ、合ちよつとつむ合茶つみの合小唄ぶし三人ザサツ浮いたくく、浮く物はなにくく宇治の柴船月の夜に合石山寺の歌まくら、立田川には散る紅葉合達摩大師の苜の船、月夜がらすや狐畏、是れもうかそぢやあるまい

新 生 新 派 京 都 初 公 演

か、サツサういた〜合二上りいと
 し若衆に合小鼓けしめつゆるめつゆ
 るめつしめつ、チ、タツボなるかな
 らぬか調べの糸の、とけて逢ふ瀬の
 盃も、かづ重なりてうき〜と、酒
 に亂るゝ狸々の、舞へよ唄への大よ
 ふ氣、サツサういた〜。詞主人ハ
 テ心得ぬ事である。只今戻りがけ、
 土藏の土前を見廻つたるに錠前が明
 いてあつた、是れはいかな事、酒藏
 のつぼを引出し、他愛なき有様、腹
 の立つ事ぢや、よい〜、一つ驚ろ
 かしてやらう、アノ愛な大盗人め、
 三人これはお歸りなされませ、主人
 おのれ啞のくせに口を利き居る。啞
 ア、、、主人ヤイ〜おのれは甍
 の癖に、盲目になつたか、甍エ、
 盲人ア、、、主人エ、おのれも盲
 目のくせに、啞になつたか。盲人エ
 、主人アノ愛な大盗人め、やるま

いぞ〜、甍まづ〜待たせられい
 主人なんとした、甍ア、、、主人愛
 な大盗人め、やるまいぞ〜、三人
 ゆるさせられ〜、主人やるまいぞ
 〜、濱の松風さんざめき吹き立て
 〜〜、吹送る追ひつ追はれつのがれ
 行く。

新 舊 大 合 同

十二月三十一日初日

五日まで 晝十一時 二回開演
 夜五時
 六日より 晝正午 二回開演
 夜五時半

第一 岩に咲く花 三幕
雅徳富士三演 瀬川幸郎脚色
 小島政二郎原作 高岡貞澄演出

第二 新曲五條橋 一幕
(長唄囃子連中)

第三 雪の渡り鳥 二幕
長谷川伸作
 早瀬直演出

御観劇料
 一等席 二圓
 二等席 九十錢
 一階椅子席 六十錢
(他に入場税各等一圓)

どうとんぼり
角座

義士銘々傳

彌作鎌腹の段



彌作鎌腹の段

中 竹本綴太夫
鶴澤寛治郎
切 竹本津太夫
鶴澤友次郎

人形

百姓 彌作 吉田 榮三
女房 おかや 吉田 文五郎
菅野 和助 吉田 玉幸
代官 七太夫 吉田 玉藏
大星 由良之助 桐竹 門造
狸の角兵衛 吉田 文二郎

この「彌作鎌腹」は奈河七五三助作の「いろは假名四十七訓」の六つ目にあたり歌舞伎から淨瑠璃に轉じたものであります。赤穂義士の一人荻野和助に絡る一哀話であります。いよく討入と極つた和助が一人の兄彌作に最後の暇乞に訪れますが、兄から代官七太夫からの家養子の話を聞き實はと討入の事を語り、断ります、兄も代官へ種々と断りますが遂に弟の大望を打明けなければならぬ破目になり遂一事情を話し断りますが代官は一大事直に御注進と馳出すので彌作は義と情の板挟みに一身を犠牲にして弟の忠義のために代官を殺し自ら鎌で腹を切るといふ熱涙

はふり落つる時代世話の傑作です。

(床本) 彌作鎌腹の段 (中)

麥つんで小麥つんでお手に豆九つ九つの豆を数ぞへて嫁の在所へ孫だきに、所も名におふ津の國かやの村の片邊りに百姓彌作が住居、夫は家業の山稼留主はおかやがまめやかに書げ拵へあたふたと歸る夫が門口から鳩今戻つた、ヲ、こちの人お前もまあ今頃までどこへ往て居やしやんした、サイノおれが戻りのおそいのは此中から戻つて居た弟の和助が事じや、ムン和助様の事とはママ何でござんすへ、サアその譯を此間からわれにも相談しやうと思ふて居た、マ、聞てくれ、七太夫様のおつしやるには此所のお代官印南瀬左衛門様まだ後取がない故、養子を仲人してくれと常々のお頼み、そちの弟

和助は淺野の浪人じやそふなが戻つてゐるこそ幸ひ養子にやれとモ達てのお勧め、おれも弟が身の納り和助も定めて悦ぼうと戻つて見れば弟は内に居ず、モウ戻るかと待て居る内早印南様へ養子の相談極つたと今朝寄たれば七太夫様のお咄し、アノマア業慾なお人がどふ言ふ縁やらちから女夫がお世話下され、其上水牢まで遁して下さつた大恩の有る人、モ何おつしやつてもいやおふならず、ぜひ共和助に得心させねば七太夫様のお顔が立ぬと思と、弟を思ひの餘り望み有とはしらにぎで、神ならぬ身ぞ是非なけれ、おかやもともにヲ、それはマアよい事弟御がお代官様の養子にならんしたらお前も肩身が上る事、早ふ和助様が戻らんすりやよいが、サア出てから五六日にもないが、どふぞけふあたり戻ればよい

と夫婦が待兼見やる瀬戸。歸る和助が大小も尾羽うちかれし浪人すがた兄者人只今歸宅と内に入る、ヲ、和助様戻らしやんしたか、今も令とてお前の噂さ、大體待てゝじやないぞへ、ハイ拙者も直様歸宅の管フト古朋輩に出合同道にて大阪表へ參つたが、イヤモ殊にない繁華の地されど有付の口はほとんどなく、それ故朋輩ともいろ／＼談じ合ひ、有付の勝手よき江戸表へ立越、奉公かせぎの言合せ、則ち今日アノ地へ出立、武士は義を表に立れば此後は斯様の事有らんも知れず、是今生の御暇乞、アイヤ今日お暇申し打立所存とそれと明せぬ身の望み、口に言ねど心の別れとはしらずして、兄彌作コレ和助何も其様に氣を落す事はないはいそちが身の上は此兄が納て置た、といふはほかでもないソレ此所の郷士

芝村七太夫様のお世話でお代官早印南瀬左衛門様へそなたを養子にやる約束、留守の中に堅めて置た。モウうろ／＼と有付とやらを尋ねふより地頭の養子に成れば其身の納り、追付結納の印を持って七太夫様がござらぶ程に、そなたお世話のお禮申しやときおいかゝりし女夫が咄し聞居る和助が當惑吐胸、是は又兄者人應忽なる御相談先拙者に一應談合有た上ハテ扱そふ手延ひびな事じやないはい是よふ物を合點しや、城も國も取上られた淺野の浪人じやと聞たら抱へる者はない上に、江戸三界でうしろ指さゝれふより兄が詞に付て養子に行きやヤアイヤ例へよい事にもせよ養子の儀は幾重にも、ハテ扱片意地な兄が悪い事はせぬが達て否じやと言てくれると大恩請けた七太夫様へおれはどふも言譯がない、デモ拙者にお

尋ねも下されず約束召れたはこなた様の御不念と申すもの、サ、其兄が不調法を繕ふてくれるが弟の孝行じや、はいのイヤモ不得心を御立腹あつて兄者人の御勘當を受る共、此事ばかりはあいと申されぬ、サ其仔細はと言ふも言はれぬ誓ひの神文、反古になさじと口ごもる、何じや仔細が有る、ム、其譯咄しや、サ、どぶじやん、サア其様子といふはモ他聞を憚る一大事なればム、呑込だ嬢酒買てこい、アイ、急に思案もつきましますまい、酒でも呑でゆつくりと相談したがよござんしよと心通して女房は埃まぶれの缺徳利提て表へ、アコリヤ、ソレ随分ひま入て買てこいよ、アイ、合點でござんす、したがこれ留主の中せり合ぬ様エ、細言言はずと早ふ行きやアイいてくるわいな、ドレ酒買て來

ませふと足も輕げにちよこゝと出行影を見送りて弟が傍へひざすりよせ、サア女房は使にやつたはし折かどみの兄弟中、おれに言はれぬ事有まい譯を咄しやと問詰られ、兄者人養子にまみらぬ其仔細は申必ず他言して下さりまするな、去年赤穂の本城明渡しの折柄、國家老大石内藏之助殿と義を結びし諸士四十餘人モ何卒亡君の仇吉良上野を討取御靈前へ手向奉らんと或は町人、乞食とまで姿をやつし幾許の心勞艱苦此四五日他行致したは山科に御座有大石殿へ一味の輩參會し、彌々彼地へ發足の日限を定め、則ち今日乗船致し大阪表に罷在る原惣右衛門殿としめし合せ出立と契約仕る、モ譬へいか様の事有共口外せまじき神文は認しかど兄者人の御心遣ひお慈悲の詞反古になすが勿體なさ是非なく語る大事の

一件他言は必ず御無用たり。主君の爲に後榮を捨忠義を守るが臣の道、爰の所を聞き譯て七太夫殿へお斷り仰られ某に武士道を立させて賜はるが猶此上の兄の慈悲と頭を疊に摺り付て頼む義心ぞ誠なる。したり侍の性根と言ふものはイヤ又違ふたものじや、世間の噂には淺野の浪人は皆腰拔、主の仇は討もせず、大石は祇園新地の一方にうつゝぬかした大たわけ、一家老の内藏之助でさへあの通りと口々の取沙汰は敵に油斷させて置て、思ひがけなふころりといわす計略とやらじやの、ア、何ぼ兄に生れてもおれは生れ落ると土百姓、そなたはちいさい時から親父様の言付で武家奉公仕やつたによつて魂が又格別じやなア、ヲ、出かしやつた、そう言ふ事なら芝村様の方は何など斷いふ、心置なふ上野を討て

名を末代に上てたも、スリヤお聞き譯下されふや、ツイノウハアハ、有がたや忝なや折角思召給はるお志を無にする段眞平御免下さるべし、某は大石殿に今一應談ずる事も有れば行て參らん、其間に兄者人芝村氏にお斷を、しかし只今申した事必ず他言は成りませぬぞ、ヲ、よいはいのソリヤモよう合點して居るはいの、得と御承知かな、弟これ見や商賣の此鐵砲再び手に取ぬ法もあるはいハア、成程其お詞にて拙者も安堵、必らず心おかれなと出行足も忠の道山科さして急ぎける。

(床本) 彌作録腹の段 (切)

後に彌作は只一人思案途方にくれけるが弟が段々の咄しを聞けば無理に共言はれず、といふて是迄色々水牢迄助けて下さつた大恩有る七太夫

様勢がひかゝつてござる、お仲人けさの様子では斷言たらてつきり御立腹は知れた事、ハア、こりやどふ言ふてよからぞと、とつ置つの思案半ば斯と様子は白臺を下部に持て門の口頼ふぞよ、芝村七太夫參つたりと聲に惻り廢忘^{まぼ}しヲ、是はマア旦那様只今とつくりと工夫してあなたへ參る所でござりますが、餘り早いお出なされよふと挨拶どぎまぎ氣をひやす、何の／＼それには及ばぬ事、ナニ可助其品是に置いて歸れ、扱彌作其方承知の趣先方へ達したれば瀬左衛門殿殊のほか悦び直様あの方の一門中へ和助養子の一件披露致されし所先づは後名相續極りしと一家一門の悦び、仲立致した拙者連も身の大慶則ち頼みの印として金子三兩小袖一重、まだ／＼是斗りでない、福有の印南氏と親類に成と言ふは彌作

其方浮み上つたと言ふものじや、ウフアハ、／＼ウフハ、／＼、して和助は彌々承知か、ヲ、承知で有らふ／＼、サ、一時も早く和助を同道、どふか／＼とたくしかけ、先越されたる詞にうろ／＼、マ、私が申ます事お聞なされて下さりませソリヤモウ今朝程お約束申まして直に弟に右の譯申さかしましてござりますが、申旦那様大恩請たあなた様のおつしやる事私は承知でござります、ハイ私は承知でござりますが、そこにむちやくちやとした譯がござりまして、と後は詞も口籠る彌作、コレサ彌作ソリヤどう致した事だ、エ、何か和作が不得心と申のか、イエ、そふじやござりませぬ／＼けれど、弟はナニヲ、侍がいやじやでアノ町人に成るつもりでござりますさふで、彌作何の事だ、エ、不承知な

れば不承知とナゼ其節に申さぬ、今日の今に成つて左様な事印南へ申されふか、サ、御尤でござります、折悪ふ弟は四五日内におりませず漸々今日歸りまして右の咄し始め致しました所に、あれにも段々望が有そふで、だまれお身は我に何と言ふた大恩有七太夫様のお世話、たとへ弟がいか様に申さふ共私が得心させ屹度養子に上ませふと大丈夫に言つて歸つたぞよ。其舌の根もか

が相立ぬと印南より送つたる頼みの金子宙にて掴むおのが慾心無理おしにかさにかゝつて罵りける、律氣の彌作氣もおろ、イエ、申し弟めは中々金銀に目のくれる様なやつじやござりませぬ、何のお前様少々

置おらふ、こな土ほせりめがうぬもうよい、もう頼まぬ日頃正直な其方と思ひ、よしない事を約束せしは某が龜忽だ、今更誰をか恨みんと言つて此七太夫印南に對し虚言者に成つた、ヲ、武士道が廢つたはい、其言譯には此所にて切腹致すと諸肌くつろげ、こてと心に浮まぬ死用意サア今是にて切腹するは印南への言譯と其方への面當だ、必ず留るな今切ぞ留るな、今切るがコリヤ彌作そちやマ胴怒な者じやぞよ、恩といふ事知つて居るか、五年以前の水牢は誰のお影で助かつた、女夫安閑として居るは自身共がお影ぢやぞよ、わりや忘れたな、サア今其方が了簡一つで七太夫を生そふと殺そふと有無の返答次第じやぞよと恩をおもしに言ひまはされ身を裂るゝよりせつなき思ひ、いつそ様子を言ふかイヤ

はかぬ中、兎や角申はエ、聞へた此七太夫が取持つ頼みの印が氣にいらぬのじやな、ア、イエ、申そんな事では、イヤ、そふ聞ゆる、イヤサそふ見ゆるはい、コリヤ何じやな兄弟申合せ有徳な町人へ仕拵へ金存分取遣はす工かもしそふ成ては頼みの百イヤサ土百姓の其方等に七太夫馬鹿にせられてはな、武士道

細を語れハイ其仔細と申すは、ナニども人に申されませぬ事でござります。イヤサ人に申されぬ事でも身共に語らねば仔細が知れぬぞよ、サア其譯語れハイ何とじや、ハイ、エ、どぶじやい、サアどふも此事斗はお赦しなされて下さりませ、ム、スリヤ様子が有と言ふも偽りじやな、イエ、申中々偽りではエ、

「弟に他言せじとの契約立ず、何と詮方涙よりほかに返事はなかりける。ム、返答のないは不得心じやなもふ是非に及ばぬと、おどしの刀拔放せば彌作取付マア」待て下さりませ、イヤ」放せ切腹致す、サア」様子申ます」マア」お待ちなされて下さりませとおろく涙に縋り付き、じろりと見やり、ム、仔細語るか、ハイ申ます」サ、ヨイハイ様子申と有にア、達て切腹するでもないはい、して其様子はナ、何とだ、ハイ是はもどふも親兄弟の中でもめつたに言れぬ事なれど大恩あるあなた様が養子の約束ならずばそこで腹切とまでおつしやる故、是非なふ申します。が申必らず人におつしやつて下さりませすと傍り見廻し膝すり寄せ、モ御存じの通り弟は淺野の家來、去年の騒動にて

一家中は皆散々中にも大石殿を頭として四十餘人の諸士が上野を討つ企て、弟も其中へ加はり今晚皆江戸へ出立との物語、侍の道が立事そふにござりませすれば爰の所を聞わけて下さりませと手を突て弟思ひに大望をむざと語るぞ是非もなき、七大夫吐息突て、扱々思ひよらざる珍事を聞はい、スリヤ大石が放埒も計略で有たよな、ヤ誰しも武士は有べき事だ數多有家中は離散し、僅に残る四十餘人亡君の仇を討んとはハア、天晴や天晴、其仔細を聞上はいかにも七大夫承知致したとサ言てはこつちの工面がア、イヤ」彌作左程義心の萱野和助印南へ仲立するはサ此身の大慶、他門の外聞彌作いよ」弟は貰つたぞよ、ア、イヤ」申しソリヤお前様御無理と申もの、何が無理だ」彌作よくものを合點致せ、

其敵と付ねらふ吉良殿は高家職だは首尾よく本意を達した所が四十餘人は皆逆磔、ことによつては一家一門兄弟成ば其方までど言ふ答に逢ふも知れず、現在一人の弟を見殺しに致さふより瀨左衛門殿へ遣せば一生樂々くらさる」と言ふものだが、それ共達て不承知なればそりや身共は是にて切腹致すア、申」そないな短氣な事サ、留るは弟に得心さすかじやて、お前様、然らば切腹サアそれは得心さすかサア」かきやて、徳利片手に女房が戻りかゝつて内の體見るに恟り分隔てマア」待て下さりませ、こりやまあとふした事で彌作殿をヤア女の知た事でない、すつこんで居おらふサア彌作返答致せ何と」ハイ其様におつしやる事なれば弟が歸りを待つて今一應すゝめて見ませふが、あなた

が是にお出でなされてはどふもそこがヤ斯致しませうふ、どうぞ暫くお引取下さりませ、否やの返事を暮六つまでにム、きつと返答致すか、ア最早八ツ過暮までは間もなし、返答延引に及び、此方より仕掛、和助と對談、ことによつては武士と武士との論に及び、打果そふも知れぬぞよ、エイサ、ゝゝ、そこを無難に納るはそち達が働きだ性根をすへて返答せよとおどしの詞突くも歎の態、鷹ひな鳥を引摺んだる兼ての工面無になす事かと門の口歩むにも一思案、今開たる様子では義を固めたる和助が魂中々變ずる所存もなし、若彼が承知せずばまんまと取つた頼の百兩印南へ歸さずばならず、折角首尾よふ暖まつたる金、歸すは残念こりや一思案をム、ヲ、ようなそれと小うなき足を早めて立歸るおかやは影を見

送つて濟ぬ様子を汲んで出す茶碗片手にこちの人、そんならどうでも七太夫様へ養子の變改ヲ、サイノ弟は段々入譯を語り斷り言ふし又あなたへ申せばいゝ今の通りじやと言ふてコレ所詮弟は得心せぬ様子、それが愚鈍から引出した此難儀、かゝア、ひよんな事になつたわいのと夫が悔みに女房も暫し途方に暮けるが、氣を取直しこれ彌作殿何のまア其様に案じる事はござんせぬ和助様じやて兄の難儀になる事じやと聞しやんしたら餘所に見ては居やしやるまい、戻らんしたら又よいやうに談合にもなるぞいな。こんな時には酒でも吞で氣をしつかりともたしやんせ、炯してこふかへ、イヤゝおりやもう酒も水も咽喉を通らぬとさしうつむいたる顔形、見るめ涙につゝかゝる癢を押へてモ常々から突詰たお前の

心あんまり義理を立過してひよんな事など必ず見せて下さんすなへ、二親に死別杖杖共思ふて居るお前にもしもの事があつたらばわしや何とせどふ成ふと夫の膝に打ふして歎く心ぞいぢらしく、心も夕陽いつきせき立戻る萱野和助、兄者人芝村へ右の斷り仰られしか、ハア秋の日脚も過たれば是より直様船場へ出立、なにおかや殿此間より段々との御世話此上ながら兄者人の儀宜しく頼存ると言ひ捨て出るを、ア、コレゝゝ待つてたも、扱まあ難儀なは七太夫殿じや斷り言ふを聞分ず、印南の一家一門披露されたれば武士が立ぬ此事ならずばコレマ減相な、こちの内で腹切と言はるゝはいのゝ、これは又けしからぬ、不承知をいかゞ申はそりやあの方の無理我儘、サイノ無理は無理じやが雉子と鷹サこ

とに段々と恩有る人面當に切腹と長いものひねくりまはしての、せつば所で右の譯でも咄したら扱はそふかと得心も有ふかとム言ひかけて見たれ共な、やつぱり了簡せぬはいのと聞て恟りナ、何とおつしやる、スリヤアノ江戸出立の入譯をさあ是非のふ言ふたわいの、エ、はつとばかりに氣は轉倒、兄が胸倉引摺み、チエ、こなたはのふ他言せまじき神文の認めしと得とこなたにさ言ふたでないか、それに大事を打明し、一味徒黨の輩へ何と言譯有べきぞ、エ、死なしたり口惜しやと立たり居たり狂氣の如く、譯は知ねど女房も傍にうろ／＼氣をあせる、光興心取直し、ハア、力なし猥りに口外せしは皆某が科、うぬ一大事を知たる七太夫住家へかけ込み討放し我も切腹、そふじや／＼と馳け出すを留る女房彌作

は猶、和助が裾にしがみ付き弟待てくれ／＼／＼／＼、大事の事は言やせぬ、／＼／＼／＼はいのふ、ヤ何とサア何ぼおれが百姓でも大事の事は合點して居る、サ、言やせぬ／＼、これ氣を鎮めてたも、マ、下、下に居や／＼、はてま下に居やいのふが今の様に言ふたはそちが心を引て見たのぢや、ヲ、それ程までに魂をすへたらば敵イヤサアノ堅い奉公仕損じも有まい、ヲ、出かした／＼なアハ、／＼、がこれ和助たつた一つ兄が頼みがある。常々から強慾な七太夫、最前の詞の端強て仲人したがるはてつきり先から禮物を受る心、そこでおれが思ふには、こつちも又斷り代さへ見せたらばこりや納りそふな事が何を言ふても水吞百姓言難くいけれどそなた少々持合が有らば何と兄に貸てたらぬかと餘

儀なき詞顔色を見やる目に浮露の玉兄者人お詞を背くと言段々御苦勞かけますわい。なるほど彼は村役人ことにあなたの恩あるもの、やお心にたらず共拙者は金五兩配分の用金是にて無事に納る様イエ／＼申長道中の入用金、是がなふては和助様のア、イヤ道連／＼もござれば其儀は又いか様共と差出す折しも打出す鐘、ア、騒動ぢや／＼／＼、アレ暮六ツ鳴つて来た／＼／＼、サ早ふ往てたも／＼／＼、ア、ソレか、濱の治郎作が所で下りの便船頼んでやりや、我も濱まで送てやれサ、行なら行が返事が遅いと又七太夫様がサアゑいわい、来たらどふなとやつ付けるは、われが傍に居ると向ふは侍人前作つて得心せぬは、よ、氣遣ひせずと送つてやりや、サ弟早ふいけ、ア、か、送つてやれ、弟早ふ行／＼

〳〳早ふ往てくれ〳〳〳〳
 そんなら船湯まで見送りませふ、ヤ
 是は御苦勞、然らば兄者人いよ〳〳
 彼一儀仰せられぬに相違はないの、
 ヲ、言やせぬ〳〳、はて扱て今のは
 ほんの氣を引て見る斗り事をやつた
 のじや、へ、おれも侍のフン兄じや
 はいと立派にいふて見送る兄、出ゆ
 く弟は武士の引はかへさぬあづま弓
 矢猛心の殘れ共、是非なくおかやと
 引添ふて船場をさして出て行く。間
 も有らせず七太夫、鉢巻襷身輕の出
 立、手鎗かひ込みつゝと通り、ヤア
 彌作あまり返答延引ゆへ身構へして
 參つたり、不承知ならば和助を出せ
 此手鎗にて胸腹拔討果す、何と〳〳
 と氣をせいたり、彌作とかふのいら
 へなく、しほ〳〳立て以前の白臺金
 の包と俱に差出し、且那樣あなた様
 へ對してはモ一言の詞も出ませぬが

マア何かはさし置て此進物お返し申
 ますかはり、失禮ながら金五兩お斷
 りの印と申し弟めはたつた今ナニス
 リヤもふ出立したか、ハイ止てもと
 まらぬ氣をせいで、ヤ、ヤ、ヤア
 と表へかけ出、内に入、我慢の眼血
 走つて彌作が髻り引掴み、ヤイあれ
 程まで詞詰致したに某にもしらすざ
 弟を出立させ、僅かの目くさり金を
 突付け事を納んと計ること〳〳〳〳
 〳〳横道者め、こりや印南より某へ
 送りし百兩、いやさ身が武士が立ふ
 かと踏つ擲いつ引措廻し、エ、爰な
 思知らずの土ほぜりめが、ウヌ先達
 て米進に詰、永牢にてくたばる所を
 助けたる其大恩有某が武士道をよく
 も〳〳捨さしたな、此上は大勢追手
 をかけ引とらへて和助めを討放すと
 馳け出るを、繩り留め、サア〳〳
 お腹立は御尤でござります、〳〳

〳〳が、どふぞ、お情には私をづた
 〳〳にも切り刻み弟はゆるしてやつ
 て下さりませ〳〳〳〳、ヤアだ
 まりおらふ、うぬが様な奴千萬人切
 たとて刀穢しだ、よいは我詞を背き
 し返報、最前附たる四十餘人の者、
 上野を討んと企んで此上は京都の西
 八條、藥師寺殿の下屋敷へ早馬にて
 馳け付け、一部始終を注進して褒美
 の銀を、アイヤ此鬱憤を晴さんと又
 かけ出すをこれ申と腰に取付身をふ
 るはせ、まあ〳〳、待て下さりませ
 〳〳〳〳エ、放しおらぬか〳〳〳〳
 〳〳、それを注進しられましては弟
 ばかりじやござりませぬ四十餘人の
 衆が大望の妨、どふぞ〳〳御了簡を
 ヤア邪魔ひろぐなと蹴飛し、慾に眼
 も暗紛れ早足出してかけり行く、彌
 作今は絶體絶命傍なる鐵砲追取て手
 早に込たる玉藥火繩片手に表の方畔

道を行く七太夫が脊骨へどふと打込
ば、ふすほり返つて死てけり、ハア、
くもう叶はぬくく所の役人殺
したれば所詮生ては居られぬ體、申
し七太夫様勸忍して下さりませく
く女夫がうけた恩も送らず、仇
で返すも因果づく、ともに死るが言
譯と、どつかと座して山刀すらりと
抜て手拭におし巻は巻ながら、追下
賤の手もふるひ、身もわなく、エ
、コレ立派に腹切らふと思ふてもア
、刃物の光で氣がおくれる南無阿彌
陀佛くく、ヲ、そふじや百姓に
似合た草薙鎌腹へ突當て一思ひと探
り取出す表へ足音、南無三寶と氣は
轉倒當途も闇に打込む鎌、アツトば
かりに目もくらみ手足をもがき七轉
八倒、のたうち廻る苦しみをしらぬ
おかやはいさせきと、ヲ、マア此暗
いのにて火も燈さず、何して居さんす

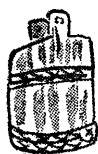
彌作殿くくと探り寄つたる夫の傍、
手先にさはる鎌の刃先血汐のしたゝ
り、ヤアくくこりやお前腹切て
か、ハアはつと玉ぎるおかやが聲、
提灯照し壹野和助門口ずつとヤア兄
者人御生害か、こはくいかにと馳
けよつて、二人が介抱苦痛の彌作、
ヲ、弟戻つたか、ア、ハア、術ない
くくはいやい、ア、コレのるま
いく、ソレおかや殿しつかりと押
へて居めされ先明しを行燈へ手早に
暖簾引切て、ぐつとしめたる即座の
腹帯、申く兄者人和助でござりま
す、お心慥に、が何故に此自害、様
子は何とく、ヲ、様子といふたら
ア、面目ないくくが一通り
聞てくれ、最前大望の咄し言ぬとい
ふたは、そちをなだめし偽り、のつ
びきならぬ手詰になり、江戸出立の
一大事七太夫へものがたり、武士と

新 興 演 藝 部

特 選 ま ざ ん い 大 會

神 戸 松 竹 劇 場

一 月 元 旦 よ り



14

ゆらのみなとせうばんちやうじや
由良彦千軒長者

山の段

山の段

竹本南部太夫
鶴澤重造
竹本伊達太夫
鶴澤友衛門

野澤八造
鶴澤鶴太郎

人形

安壽姫 桐竹紋十郎
對王丸 吉田光之助

この淨瑠璃は寶曆十一年五月大阪竹本座で上演。作者は近松半二、三好松洛、竹本三郎兵衛等の合作。全三段よりなり、山の段はその中巻の切に當る。筋は大江時廉に頼まれて岩木政氏を暗殺して丹後の三箇莊を與へられて豪華な生活をする三莊太夫の許へ、政氏の遺子安壽姫と對王丸が人商人に誘拐されて雇はれて來毎日冷酷な待遇をうけるが、姉弟は互ひに慰め勵まし乍ら苦しみ耐へて行く。

(床本) 山の段

うた人の、三十一もじの種となる。由良の湊の風景は筆に及ばぬ眺とて

まだとけやらぬ谷の戸の雪をさそへる鶯の聲に春をぞ迎へける。浮世とは何の浮世に始りし其うき事の身につもる對王丸、安壽の姫、人商人にかどはかさされ三莊太夫が手に渡りしづが手わざの鎌拐汐汲桶のおもきよりおもき思ひの父母に死での別れ生別れ日毎の別れ姉弟が涙の種や別れが辻、エ、申し姉様、今日は尙しもお顔のやつれ。お心惡ふござりませぬか、とと様にも母さんにもお前一人を力草わづらふてばし下さんすなと、くどけば姉も打しほれヲ、姉弟なりやこそ其れに姉を大事にかけてたもるコレよふききや、毎夜々々の折檻が病にならいでなんとせう奥州五十四郡の主、判官殿の忘れがたみといはるゝ身が浮世をしのぶ忘れ草といやしい業の下主奉公、毎日々々三前の汐、きのふはしづに助けられ

數を合せし夕べのしぎ、今日はたれが助けてくれふ。サア山へ行きやじしも一所にしばからふサア、おじやと先に立行けば袂に取りすがり姉様わしと山へいてお前の汐はたが汲ます。人に汲んで貰ふてさへ、ぶち打擲の棒ざんばいつらい苦しい艱難も姉第一所に居ればこそ辛抱も成ります、ひよつとお前の身の上にもしもの事が有たらばわしやなんとせうどうせうぞ、サア濱へお出遊ばせわたしもともに汐汲ふ詞ヲ、よふいふてたもつたのふ、自ら女子の事そもじは大事の殿様の子、姉にかまはず山へいきや、イエ、わたしは、イヤわしがと争ふ思ひ血筋のしんみなく、しぼる袖袂對王丸は鎌追取り自害と見るより取すがり氣がちがふたかコレ弟、何故死るともぎはなす。其手を取てコレ姉様何故とは聞

えませぬ、お乳や、めのとに侍れたる姉弟が今は寒夜のあらむしろ、いやしい土民に踏れたりたゝかれたり口惜しい共無念な共名字のけがれ我身のはぢお姉様殺して下さんせ、ヲ、道理ぢやもつともじやわいのふ、扇の橋のうきなぎ力と頼む要もちり、後は足弱追手のあやうさ救ふてくれると思ひの外、兄弟のみか母様迄、人買に賣り渡され有ふ事かあるまい事か世にも稀なる此里の三莊大夫がどうよく心、賣渡されし憂き、つらさ。おいとしや母様の何國にござるか知らねど朝夕、行く時も二人が事、思ひ暮し泣くらし、さぞなつかしう思ふてござろ、コレ親子は一世死で未來であわるればつれな命、生ては居ぬとくどきたつれば弟もなれば逢ふと思ふても、どこを尋ねるしやうどもなし、ましておよ

わい、生れ附涙の種が病となるもおかくれなされたら生て甲斐なき世の中に死にも死れぬ姉弟を神や佛もこれ程迄、みすてたもふか恨めしやと互にひつしと抱付前後正體泣沈む心ぞ思ひやられたり、いつ迄いふても返らぬこと逐ふては又難儀そなたも山で柴仕事、姉も濱へ行きます程にけがせぬ様にしてたもや、アイ、そんならおまへもけがせぬやうに頼むと泣別れわかれが辻を右左一足いては立どまり坂へかゝればコレ對王まだ四方山に残る雪手足がこゝへてたまるまい必ず木の根につまづいて谷へ落ちてたもんなやといふも次第に遠ざかり、ヲ、イエ、と姉弟が同じ思ひに引足の姉さま汐にさそはれて流れてばしたまはるなと顔見ゆるまで延上り呼べど叫べど山彦の音はこだまか松の風吹はらひゆく汐衣姿隔つる春霞涙ながらにたどり行。



關取千兩幟せきどりせんりやうのぼり

猪名内の段

猪名川内の段

おとわ 豊竹駒太夫
猪名川 竹本織太夫
大阪屋 豊竹富太夫
呼遣イ 豊竹宮太夫
鐵ヶ嶽 竹本文字太夫
鶴澤清二郎

人形

女房 おとわ 桐竹紋十郎
猪名川 桐竹政龜
鐵ヶ嶽 桐竹門造
大阪屋 吉田文之助
呼遣イ 吉田兵次

大阪の商人鶴屋禮三郎が新町大阪屋の遊女錦木に溺れ、悪人團右衛門、九平太、鐵ヶ嶽等の奸計にかゝつて窮地に陥つたのを、禮三の最良力士猪名川夫妻の俠氣によつて錦木の身請けを濟ませます、一方近江の藩士三島彌太夫の女お才は許嫁のある身で禮三と私通した爲めに勘當されたのを千田川に隠まはれます。錦木は猪名川の女房おとはに對する義理で再び茶屋奉公をする身となり禮三は鐵ヶ嶽を斬つたために前途を悲しみ遂に錦木と情死まで企てましたが結局人々の盡力で目出度納まるといふ筋合で、この猪名川と鐵ヶ嶽の條は明和の初年に南堀江に勧進された江

戸の相撲稻川と大阪藏屋敷の抱え力士鐵ヶ嶽との間にあつた事實により取入れて脚色されたものでありますこの作は全九段續きでこの段はその二段目になつてゐます。作者は近松半二、竹本三郎兵衛、三好松洛等の合作、明和四年八月大阪竹本座初演

(床本) 猪名川内の段

芝居は南、米市は北、相撲と能の常舞臺、堀江々と國々へ、鳴り響きたる猪名川が、角方の内は夫婦連、爰に堀江の假住居、店は初日の飾り物、半紙、毛氈、煙草盆、羽織脇差、取禪、酒は松葉へ米俵、餘所の軒端をかり初の賑々しくぞ見えにける。詞 扱積んだの、見事じや、何羽織、脇差米もあり、えらい張込じやの、イヤ又二三年こつちの相撲にめつたに負けた事のない猪名川。シ

タガ今度の相撲には、千田川が病氣ゆえ、はづむまいと思ふたが、思ひの外きついはずみ。ソリヤ其管いの勸進元の顔はよし、江戸方九州方残らず上り、猪名川といふ最肩のつよい、力の強い、あんな男を持つ者の顔が見たいと表から、内を覗いて高々と、夫の噂女房おとは、出合頭に聞く嬉しき、顔に少し紅桔梗、前垂の紐繩暖簾、上げてにつこり。詞北野屋七兵衛でござります。オ、是れは、島の内の七兵衛様、よふお出、サア、此處へと打ち通り。詞扱マアきついはずみやう、千田川が出ぬ故に、どう有らふと思ふたが近年の大入、今日の大方こゝの關取が、とらしやるで有ると思ふて、見物に來たついでながら、ちよつと悦びに寄りましたが、關取はまう往てかへ。イエ、今日は叶はぬ用事

につき、つい近所まで參られましたか、まう戻つてござんせふ。ほんにマア日外はいかにお世話で、練物を緩りと見物致しまして、忝ぶござります。何時でも島の内の祭は、俄が多うて賑かなこと、わたしらは在所者故、物見高いとモゑてはこちに呵られます。イヤモこちらの方も門がざわつく許りで、奉公人が動かねば、肝心の商ひが少ない。ヤ斯ういふ中に遅なつたら這入れまい、關取へよい様に頼みます。と座を立上れば、オ、忙しないマア、御緩りと成されませ、イヤ遅いとよい場がござりませぬと、挨拶そこへ歸りける町中の最肩に肩も猪名川が、鐵ヶ嶽陀多右衛門と、打ちつれ歸へる我家の内。詞オ、こちの人戻らしやんしたか、陀多右衛門様ようお出、初日からまだお目にかゝりませぬがきつ

い大入で、お目出たうござります。アイそりやモウ互ひでござんす。見物の足が早さに、そろゝ行かふと出かけた道で、猪名川に逢ふたによつて、それでちよつと寄りました。それはマア、ようこそお出、シタがまだ漸と今の先、櫓太鼓を打出しました。マア緩りとお茶なりともと、會釋に汲出す花香より、心の花香ぞあいそ有り。詞コリヤ女房ども、留守の内へ、今日の角力割はこなんだか。イエ、まだ何にも持つては、ハテ埜の明かぬ、今まで知れぬは何ぞ紛紜でも有かいの陀多右衛門。サアおれも初日に、鈍な角力を取つたによつて、何でも今日はと思ふて居るが、誰と合すか相手によつては、魂膽も工夫もして見にやならぬ、いつそ聞にやらふかい。ハテマアようござんす。其内には持つてきませう

幸ひ貰ふた肴も有る、主と一所に飯上つて行かしやんせ。ドレ拵へうと木綿襪、かけまく神に有らねども、菩薩廻りの女房は、勝手へ立つて入りにけり。詞 猪名川様お宿にござりますか、新町の大阪屋からまゐりました。佐右衛門と申します。錦木太夫が身請の跡金、今日中に遣はされませう、ちとこちらに身請の客衆がござります故、其方へ相談いたしますが、お前のお顔を立まして、今日中は待ちます。翌日になつたらこちらの太夫をやります程に、その時意地無地のない様に、念を入れいと申されましたと、いひ捨て使は立ち歸れば。詞 ヤア其身受外へさして、猪名川が立つ物かと、かけ出すを。詞 コリヤ、待て、其身請の譯も其客も、此鐵ヶ嶽がよう知つて居るほどに、マア行かずともよいわい。

ム、すりや其身請の相談を、われがよふ知つて居るか、シテ其身請の客といふは、イヤ外でもないおれじやオ、此鐵ヶ嶽陀多右衛門じや程に、マアさう思ふて貰ふかいと、俄にこつきもふしくれ立、頬髭撫で、のさばり顔。詞 ム、聞えた、コリヤ九平太が腰じやな。もつともわれがためには大事にかけにやならぬ人じやが爰をよふ聞いてたも、あの錦木太夫は、おれが親方禮三殿とは、モきつう深い中じや、其錦木ゆえ勸當迄、請られた事、コリヤモウ云はいでもわがみよう知つて居やる事じや、そこらはまあ取つてほつて、五百兩といふ金迄わたし。跡金の二百兩才覺する其内に、太夫殿を外の手へ渡しては、どうもおれが顔が立たぬ。わがみが仲へ這入つたこそ幸、どうぞこつちの身請を、じやみさす様にい

ひ廻してたもるまいか。ヤコレ鐵ヶ嶽頼むと詞を下げ、事を分けたる一言を、鼻であしらふ惡者作り。詞 オ、此身請は、どうせうと斯うせうと、俺がまじや、汝が頼む様にしてやるといふたら、勝手は可からうがマア厭じや、わりや惠海庵で、九平太様をひどい目に合はしたげなオ、つよいこつちや。其仕返しを頼まれて居る此鐵ヶ嶽、あんだらくさい事いふない。ム、すりや其時の事が根葉になつて、それ故身請の邪魔するの。イヤ邪魔するとは、何のこつちや、錦木が身請は金づくじやぞよ、僅か二百兩ばかりの跡金、團子の喉に詰つたやうに、ぎちかはくと、吠へづらかくとは違ふて、七百兩といふ金をがらりと出して身請するのじや。なる程もつとも。とかく銘々親方を、大事に思ふ

から起る事じや。がナント斯してたもらぬか、どうぞ俺を、九平太様へ連れて往て、あなたの胸の晴れるやうに、打たしなりと又踏むなりとさして、身請は此方へさしてたも。モわがみのいやる通り、金づくの事なれば今日中に跡金さへ、出来れば頼む事も何もなけれど、サちつと急には出来にくい。尤も在所へいふてやつたら、工面の出来る事も有うが、親共の耳へは入れとむない。それでわがみを頼むのじや。又折角身請仕やつてからが、とても太夫が九平太様の、女房にやならぬ、スリヤコレ畢竟が費えと云ふ物じや。黙りあがれやい。太夫が随ふが随ふまいが、それや構はぬ、九平太様にや金が澤山有る。サ小判が澤山有るによつて其金でわいらが面をはり廻すのじやサイノ、金で面をはらずとも、此猪

名川をどうなりと、腹の癒る様にして、どうぞ身請をさしてたも、一生の頼じや、恩にも着よ、コレ手を下げる鐵ヶ嶽と、頭を壘に摺りつけて頼む心ぞ切なけれ。詞ム、そんなら何か、踏れても、擲たれても、わりや言ひ分はないといふのか。イヤモ聞分けてさへたもれば、たとへ此身はどうなつても、ム、ム、ヤコリヤ相談が面白い。あの九平太様の名代に、マア一寸斯うせうかいと、立蹴に控と蹴飛ばし。詞何じや、何じや、何をびこん、さらすのじや。エ、わりや唯た今、云分無いと云ふたぞよ、但し言ひ分が有るのか。イヤサ、何の言ひ分が有るもので、有るまい、何のあろぞい。惠海庵での意趣返し、わりや九平太様を斯う撃はしたか、ヤ斯う踏んだか、

も引しやなぐり、苛責む折から表へ息せき。詞ハイ今日の相撲割でござります。まう追つ付け土俵入じやほどに、早うお出なされませと、書付抛り込み立ち歸へれば、陀多右衛門押披き。詞何じや、鐵ヶ嶽に猪名川ム、すりや、今日の角力は、コリヤ見い、俺と汝とが角力じやとやい、ム、時も時、折も折、わがみと俺が立合とは、ハテ氣味合な事じやのと云ふも心に一思案。詞コリヤ、汝も池田の猪名川と云はれては、國々へ名の通つた者、又俺も大名のお抱、殊に大阪は初てなれば、此角力失敗るが最後扶持離れじや、すりやコレ二人ながら大事の角力九平太様の名代は惠海庵の仕返ししたれば、此算用は濟んで有る、が又錦木が身請の事は俺次第じや、オ、此鐵ヶ嶽が心次第じや程に、水心有れば魚心有り

く、弱みを付込む厄病の、髪も頭

次第じや程に、水心有れば魚心有り

頼む事も頼まれる事も、マ今日の角力終ふてから、其上の事にせうわい汝も随分神佛でも叩き廻して、俺に勝つ様にせい。したが可哀や、俺と取つては骨身が碎けて、重ねて土俵踏む事はならぬぞよ、何うぞ頭取衆を頼んで振り替へて貰ふてなりと、撲らぬ方が勝ちである。が夫ともに撲つて見やうと思ふなら、サ魚心有れば水心。ナ猪名川、土俵で逢はうと、強い詞の何處やらに、あぢな鐵棒引き摺る雪踏、ぐわらつかせてぞ詞コリヤ猪名川、ソレ今いふた魚心あればナ、水心、必ず忘れて呉れなよ、ハ、ハ、ハ、ハ、出で、行く。跡に猪名川諸手を組み、思案に暮れて居たりしが、詞段々日限の切れた跡金親方が催促するも、九平太が皆所爲とかく鐵ヶ嶽を抱き込んで、彼方の身請を延ばして貰はふより外はない

と云ふても一筋繩では往かぬ奴、抱き込む仕様は、ム、太夫が身請は俺次第、魚心有れば水心有り。オ、こりや今日の角力を、ふつて遣らざるまいわの、ソレ、彼と俺とが立合ふこそ幸ひ、美しう振つて遣り彼奴に勝を譲つて置いて、其上で退引させず、頼むが近道上分別、とは云へ名取の鐵ヶ嶽、何う魂膽してなりとも、投げねば成らぬ晴れの角力云はゞ一生懸命の、大事の角力を金故に、振つて遣る猪名川が、心の内の切なさ、汚なさ。摩利支天にも見放され、角力冥加に盡きたかと、思はず拳を握り詰め、身を顛はして男泣、始終立開く女房が、涙隠して。詞オ、此方の人とした事が、先きにから飯肴へて待つて居るのに、こゝで喰るか、奥へ据ゑうかと、何氣無ければ素知らぬ顔。詞イヤモ飯なら

喰たう無い、ヤホンニ角力から呼びに來た、ドレ往て來うと立ち上れば詞コレ待たしやんせ、ソレ髪が強う亂れて有るぞへ、人中へ見苦しい結ぶて居たら隙が要る、つひ撫付けて置いてたも、オ、お前もこんな髪して、行かしゃんした事が無いが、いつその事、何も彼も云ふて聞かして下さんせぬか。詞ヤ云へとは何をサイナ、お前の心のナ、それ纏れ髪撫で付けて置かうより、詞いつそさつぱり云はしやんせぬかと云ふ事いな。詞イヤ云ふまい、なんぼ私に云へと云やつても、高が女子の手業、云ふたら大方後れが出やう、ついで撫で付けて置いてたもと、傍に直れば女房も、押しては云はぬ纏れ髪鬚のほつれを撫で付ける、櫛の背より夫の胸、寫して見たき鏡立。詞サ

ア可いか見さしやんせと、向ふ鏡の蓋取つて、寫せば寫る顔と顔。詞申し猪名川殿、色も蒼ざめ、そしてまあ、目の中も潤んで、何うやら氣色も悪さうなお顔付、まう今日の角力へは斷り云ふて行て下んすな。詞何をあんだらつくすぞい、いつは鬼もあれ今日の角力、鐵ヶ嶽と此猪名川初日の出ぬ先から、町中が待つて居る晴の出合、何でも鐵ヶ嶽を土俵の砂へ埋めにや置かぬ。イヤソリや嘘じや、今日の角力は鐵ヶ嶽に振つて遣るお前の心。コリヤ聲が高い、スリヤ先刻からの様子を殘らず、アイ一間で聞いて居りました。僅な金に手詰つて、難儀さしやんすがわしや悲しいわいな悲しいわいな。いつそ此譯親父様に、詞白痴奴が、夫云ふ程ならば此様に、人に擲かれ、踏れはせぬわい、昔氣質の親父様、打明

けて物云ふと。禮三様に意見の何のとやかましい。若いお人の水の出端若し命生害になつた時は、ナ、コリヤ千日に芘つた葎じやわい。ア、急な事でさへ無くば、工面の仕様も有らうに、僅二百兩の金故に、大事の角力を振つて遣らざ成るまいと思へば、胷甲斐ないやら口惜いやらで、俺や胸が裂ける様なわい、オ、道理でござんす、もつともでござんすわいな。角力取を男に持てば、江戸長崎や國々へ行かしやんすりや、其跡の、留守はなほ更女氣の、獨りくよくよく物案じ、夫に怪我の無いやうにと、祈る神様、佛様、妙見様へ精進も、戻らしやんして顔見るまで案じて夜を寝ぬ女房の、今この切なる苦しみを、連添ふ私に言はしやんせぬ、お前はそれほど無情と、女夫

怨み涙に時移り、早追ひの呼使ひ。詞申し土俵入でござります、早うおいでなされませ、ちやつとくは是非もなく、詞女房ども、往てくるぞや。エ、そんなら何うでも行かしゃんすか。ホ、鐵ヶ嶽を抱込んで工面通り行きや格別、もしも行かねば絶対絶命。エ、コリヤこれが暇乞ひにならうも知れぬ。さらばとばかり一と聲を、跡に殘して出で、行く。これなう待つて下さんせ、たつた一言言ひたい事、猪名川どのと、見れども跡は雲霞。詞夫の命にかゝはる大事、コリヤ斯うしては居られぬと、帯引締めて夫の跡、慕ふてこそは。



ほち

女夫の春駒

豊竹和泉太夫
竹本文太夫
竹本文太夫
竹本さの太夫
竹本相瀬太夫
豊竹英太夫
鶴澤叶
野澤吉左
鶴澤寛若
野澤吉藏
竹澤團作
豊澤廣彌
豊澤仙松

人形

お
ら
七
く
吉田榮三郎
吉田光之助

女夫の春駒

引ぬき萬歳

この「女夫の春駒」は今度新しく作曲された新作淨瑠璃で、新年の舞臺に初めて上場されるもの。おらくと文七の女夫連れが縁起のよい春駒をもつて、目出度く踊り舞ふと云ふ「万歳」ともいふお正月には相應しい所作事です。

女夫の春駒

引ぬき萬歳（上の巻）

新玉の年立満る朝日影、あまねく照す大八洲國の光りの立登る、勇む勢の辰の年、はでな姿の女夫連、目出たや、春の始めの春駒なんど夢に見てさへよいとや申す、乗つたか、乗つたは、ドウドウ、ドウ、年よし世よし、世の中よし、子飼の種を申そうならば、左の袂に三日三夜、右の袂に三日三夜、兩方合せて六日六夜、とめたる子飼をよいとや申す、乗つたか乗つたか

乗つたは、ドウドウ、ドウ、年よし、世よし、よいとや申すと、うたひける。

ノウおらく今年は庚辰の年何と目出度じやないか、ヲ、文七さんの言はんす通り其目出度初春に春駒とは猶勇ましいじやないかへ、ヲ、そふとも、その勇ましい目出度折から祝ふて四季の踊りを始めた、アイ、お前も一緒に、サ、おどりの始まり。咲いたは、櫻の花よ、夏は牡丹に秋は菊梅の花笠さしかけて、二人連れて行こぞいの、行くとは、そりやどこへ、されば名にあふ蓬萊山とは日の本富士の峯、たなびき渡る春霞、見ゆるは、和田の原、帆づらにエイさつさ、いざや急がん來たまへと、手に手を取つて走り行。

女夫の春駒

引ぬき萬歳（下の巻）

これも目出たい初春を、祝ふて爰へ

引ぬき万歳

人形

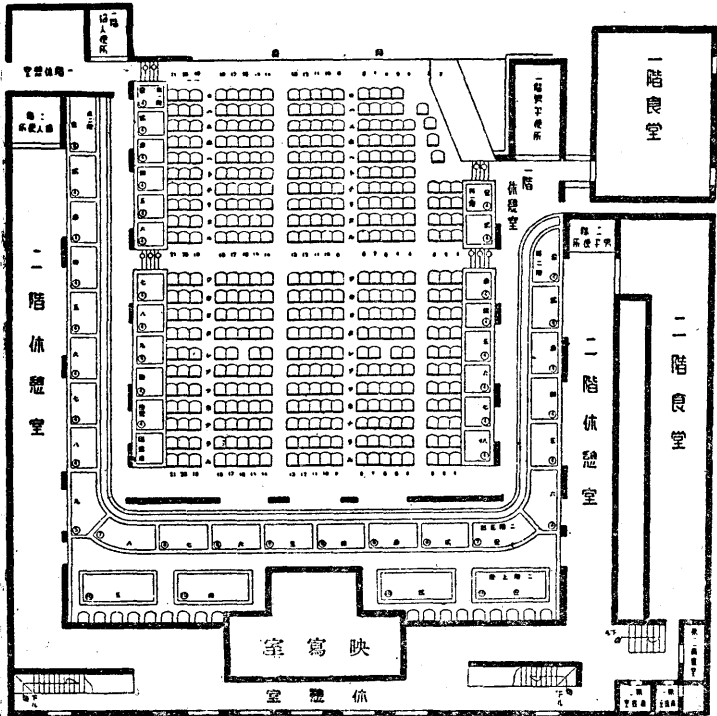
若藏 桐竹政龜
吉田小兵吉

豊竹伊勢太夫
豊竹竹太夫
竹本隅若太夫
豊竹松島太夫
竹本越名太夫
豊澤仙糸
豊澤猿二郎
竹澤團六
野澤吉季
野澤勝芳
鶴澤綱延

万歳、ヤンラ目出たや御代も治まり民も恵みに、心引しめ鄙も都もウンタラベイト賑ふ春の始を壽ぐ門松に東の大路も西の小路も隅から隅まで祝ひ納めて目出度けれ。コリヤ〜才藏はどれにおるやい、おん前に候ハ、、、何と才藏、今日の御慶賀謹んで祝し申さふ先もつて諸國の旦那さま、町中の旦那さま、御息災にござりませふ、やはやせや万歳、諸へや万歳、ヤべれべんがべれ〜べんたつば、ちつば、ヨイぼん〜〜、雉子のめん鳥が、うごめく尻に、むつくりこつくりむつくり、ばつと立ことついといた、べれべんがべれべれべん〜〜〜ア、しんどや〜、サア〜才藏これから商ひ繁昌、大阪の町をばやしませふさふ〜、毎年嘉例の通り、誠に目出度候ひける。コリヤ〜才藏、是より直に商ひ神、西の宮の戎殿へ參詣致せ、ヲ、心得申た

ヤ万歳〜、はやせや万歳。寶やれ万歳、しつかと万歳、万歳〜万歳樂で、お目出たい、ヤアエイヤハイヤ、コリヤ〜やしよめ〜、京の町のやしよめ、賣たる物は何々どんす縞珍に、ひざや、綸子、唐織、唐綾、からひ物は唐辛子、山葵、はじかみ、山椒、胡椒。イヤのふ其胡椒いかふ辛そふにござる。ヲ、辛そうなちよつとつんで見よか辛いか。いかふからい〜、ハクシヨ、ハ、、、コリヤむせられてござる、ヤエンヤハコリヤ〜、それを打過ぎ、そればの棚見たれば金銀珠玉、豆に小豆に大根、かぶら、加賀の牛蒡毛ごんぼ、辛子の粉、山椒の粉、胡椒、めつさいな大将じや〜、松たけ兩家の御大將、お家は福々芝居は大入り、千代八千代に高名ぼん〜ぼ〜ぼのぼんとぞ、はやしける。才若才藏津の國の福神詣での万歳樂、西の宮へと急ぎ行。

文樂座御席場御案内



御、觀、覽、席、は、大、部、分、椅、子、席、に、な、つ、て、居、り、ま、す、か、ら、お、一、人、で、も、御、愉、快、に、洋、服、で、も、お、樂、に、御、見、物、が、出、來、ま、た、お、出、入、が、御、自、由、で、す。

前、賣、切、符、壹、等、席、の、お、切、符、は、五、日、前、か、ら、發、賣、致、し、ま、す、ま、だ、五、日、以、後、の、お、切、符、も、壹、等、席、に、限、り、御、豫、約、申、上、げ、ま、す、か、ら、上、圖、の、座、席、表、に、依、つ、て、お、早、く、御、望、み、の、御、場、席、を、お、申、し、込、み、に、な、れ、ば、お、心、の、ま、ま、に、お、好、き、な、處、が、御、自、由、に、と、れ、ま、す、御、用、命、の、節、お、呼、出、し、の、電、話、は、南、四、七、壹、壹、番、で、御、座、ら、み、ま、す。

切、符、賣、場、右、指、定、席、切、符、は、當、日、前、賣、と、も、正、面、西、側、本、家、入、口、に、て、發、賣、し、て、居、り、ま、す。
二、等、席、三、等、席、切、符、は、當、日、正、面、入、口、に、て、發、賣、致、し、ま、す。

觀賞おほえ

昭和十五年一月 日

京鹿子娘道成寺

一谷嫩軍記

新曲三人片輪

義士銘々傳

由良湊千軒長者

關取千兩幟

女夫の春駒

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位

一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場である。

文樂座人形淨瑠璃は 常に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず

我日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであ

ります。従つて開場毎にこの大使館が全う出来ませうやう、皆様の御

期待に反かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を

致して居りますが尚御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存

じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座います。お帽子は椅子の下

に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しま

すから成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひ

ます。

お煙草は 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜ

ひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座居ます。

賣店は 二階東側と一階西側休憩所に御座居ます。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一

階と二階に御座居ます。

場内にて 寫眞撮影は絶對にお断り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座居ます

お出口は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は

正面人口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號人マークを付けて居りますから御用の節は御申

附け下さい、其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程

お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて

相勤めますから豫め御諒承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として

案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御

會合席上へ出張公演等御相談に應じよう、御案内申上げます事

致しました。御一報次第参上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑤三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十四年十二月廿一日印刷
昭和十五年一月元日發行 發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪府南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店內
彌軒樓 發行人 鳥江鏡也

大阪府西區土佐堀通一丁目十二
印刷所 永井日英堂印刷所
一部 金二十錢

文樂座南一食堂

賜命下御に前幕一は用御の事食御
すまい座御で利便御極至ばれは

大坂四ツ槁

南温泉料理

御宴會にも
御家族連にも

電話南

75

—	—	—	七
三	三	三	〇
二	三	三	—
四	三	二	—
番	番	番	番

